

## 調査の概要

---

### 1. 調査概要

#### (1) 調査目的

小・中学校に勤務する教員の学校での取り組みの様子や教育改革に対する意識を明らかにする。

#### (2) 調査方法

##### ア. 調査対象及び対象校数

###### ①調査対象

全国の公立小・中学校に勤務する校長、教頭（副校長）、教員。

###### ②対象校数

小学校 603 校、中学校 616 校、計 1,219 校。

##### イ. 調査対象校の抽出方法

全国の公立小・中学校のリストより無作為抽出で対象となる学校を 1,250 校（小学校 625 校、中学校 625 校）選定した。その後、事前にはがきで調査協力をお願いした。このはがきにより協力拒否があった 31 校（小学校 22 校、中学校 9 校）を除外し、残りの 1,219 校を調査対象校とした。

##### ウ. 調査の実施方法

学校通しによる配布、郵送による回収の自記式質問紙調査。

調査対象となった 1,219 校の小・中学校に対して、1 校あたり 8 通の調査票を校長に送付し、校長から教員に配布してもらった。なお、配布の割りふりは、校長自身の票 1 通、教頭・副校長の票 1 通、教員の票 6 通とし、教員は担当学年がわかるように配慮してもらった。依頼を受けた教員には、自宅等で調査票を記入し、調査票を調査実施事務局宛に返送してもらった。

##### エ. 調査時期

2005 年 3 月～4 月。

### (3) 調査項目

調査項目の構成は、以下の通りである。

#### ①勤務校について

- ・所在地や規模
- ・勤務校の特徴
- ・学校の施設や設備に対する満足度

#### ②学習指導や職務の状況について

- ・学習指導で心がけていること
- ・「総合的な学習の時間」の取り組みへの評価
- ・「総合的な学習の時間」に対する意見
- ・職務の忙しさ
- ・職務の状況

#### ③学校教育に対する評価と意見について

- ・学校教育で身につける必要性が高い能力・態度
- ・学校教育で身につけている能力・態度

#### ④教育改革に対する意見について

- ・授業や学習指導の改革に対する意見
- ・教育制度の改革に対する意見
- ・学校評価や教員の改革に対する意見
- ・教員の人事考課制度に対する意見

## 2. 回収結果

調査対象となった 1,219 校に対して 8 通ずつ、計 9,752 通の調査票を配布した。  
調査票の有効回収数は、2,503 通（回収率 25.7%）である。

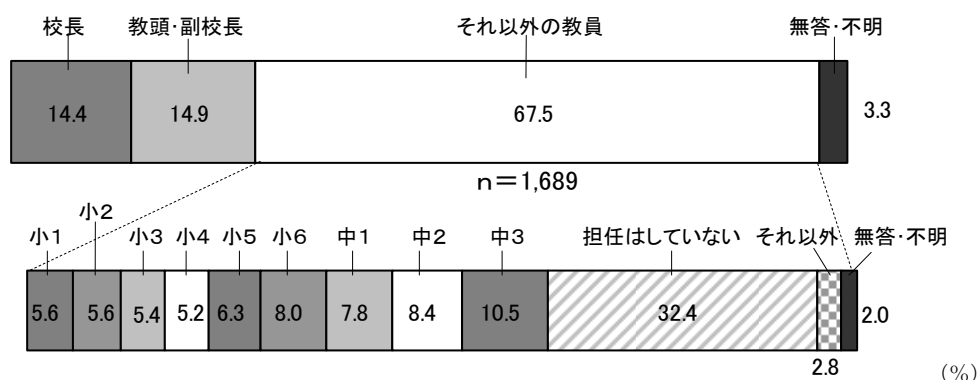
### 3. 回答者の特性

#### (1) 回答者の職名・担当学年

回答者のうち、「校長」は14.4%、「教頭・副校長」は14.9%、「それ以外の教員」は67.5%、「無答・不明」は3.3%である。今回の調査では、学校長宛に8通の調査票を送付し、校長、教頭・副校長、および6名の教員に回答してもらう方法をとっているため、「校長」、「教頭・副校長」の割合が実際よりも多い結果となった。

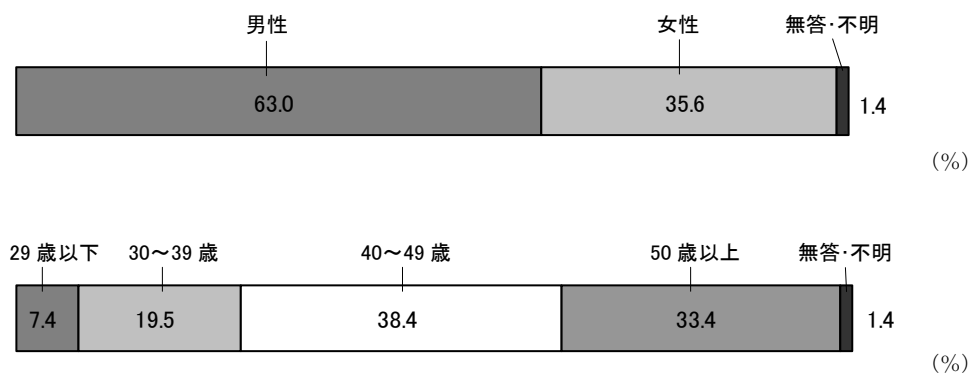
さらに、「それ以外の教員」と回答した人(1,689名)に対して、担任をしている学年をたずねたところ、「小1」が5.6%、「小2」が同じく5.6%、「小3」が5.4%、「小4」が5.2%、「小5」が6.3%、「小6」が8.0%、「中1」が7.8%、「中2」が8.4%、「中3」が10.5%、「担任はしていない」がもっとも多く、32.4%、「それ以外」が2.8%、「無答・不明」が2.0%であった。

以下では、「それ以外の教員」を「一般教員」と表記する。



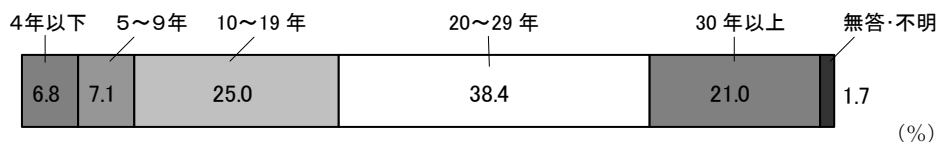
#### (2) 性別と年齢

回答者の性別をみると、「男性」が63.0%、「女性」が35.6%、「無答・不明」が1.4%であり、男女比がほぼ2:1の割合となっている。文部科学省の『平成13年度学校教員統計調査』によれば、本務教員のうち男性教員の比率は小学校で38.4%、中学校で60.5%である。このことから、本調査では実際の小・中学校教員より男性の割合が高くなっていることがわかる。これは、先に述べたように、回答者に占める校長、教頭・副校長の割合が高いことが影響していると考えられる。



### (3) 教職経験

回答者の教職経験は、「4年以下」が6.8%、「5～9年」が7.1%、「10～19年」が25.0%、「20～29年」が38.4%、「30年以上」が21.0%、「無答・不明」が1.7%である。



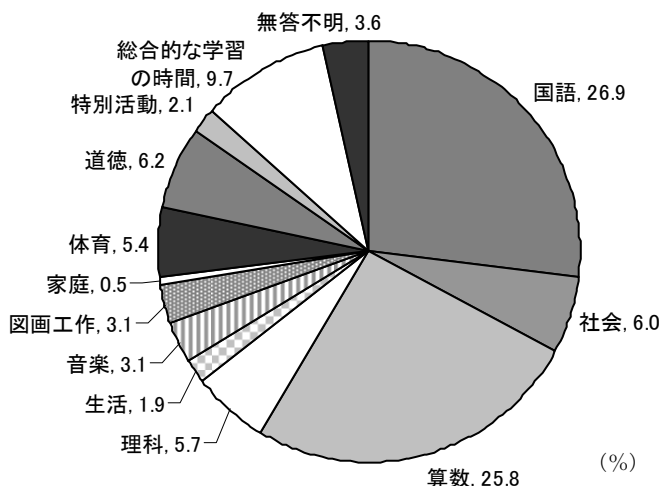
### (4) 力を入れて研究している教科・担当教科

小学校の教員には、力を入れて研究している教科や時間を、また、中学校の教員には、担当している教科をたずねた。

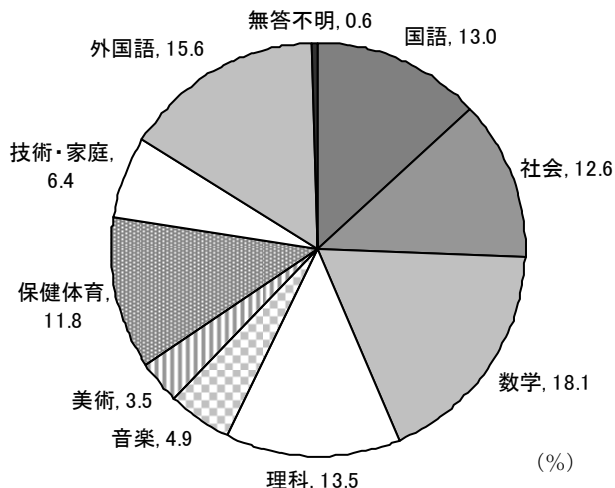
力を入れて研究している教科や時間（小学校の教員）は「国語」が26.9%、「社会」が6.0%、「算数」が25.8%、「理科」が5.7%、「生活」が1.9%、「音楽」が3.1%、「図画工作」が3.1%、「家庭」が0.5%、「体育」が5.4%、「道徳」が6.2%、「特別活動」が2.1%、「総合的な学習の時間」が9.7%、「無答・不明」が3.6%であった。

担当している教科（中学校の教員）は、「国語」が13.0%、「社会」が12.6%、「数学」が18.1%、「理科」が13.5%、「音楽」が4.9%、「美術」が3.5%、「保健体育」が11.8%、「技術・家庭」が6.4%、「外国語」が15.6%、「無答・不明」が0.6%であった。

①小学校教員 (n=1,053)



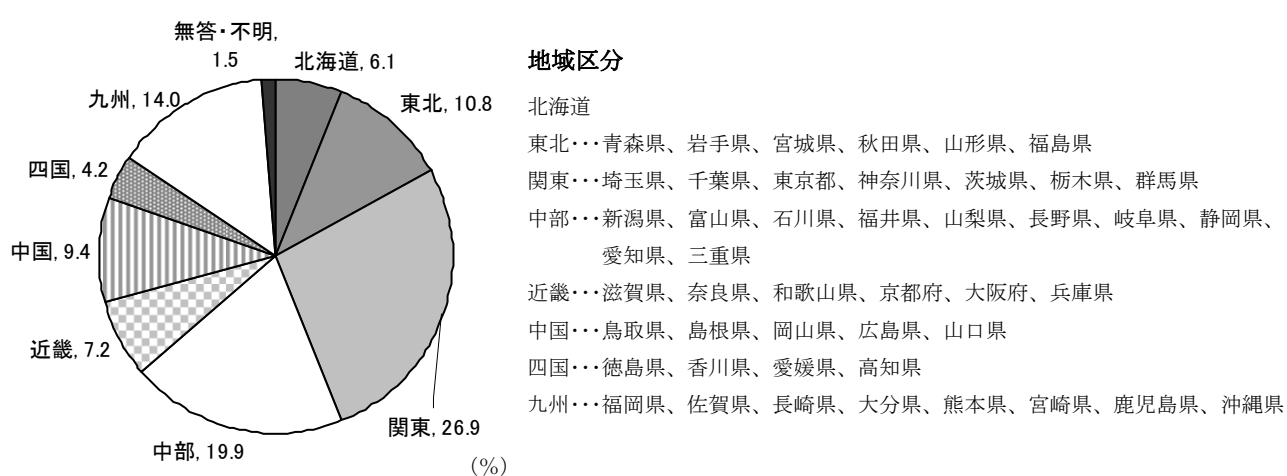
②中学校教員 (n=1,128)



## 4. 回答者の勤務校

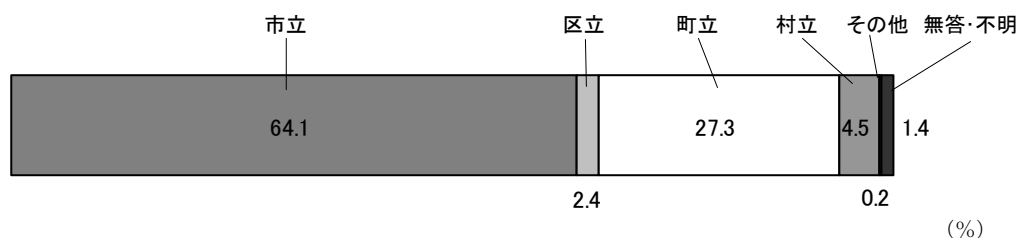
### (1) 勤務校のある都道府県

回答者が勤務する学校がある都道府県を地域別にみると、「北海道」が6.1%、「東北」が10.8%、「関東」が26.9%、「中部」が19.9%、「近畿」が7.2%、「中国」が9.4%、「四国」が4.2%、「九州」が14.0%、「無答・不明」が1.5%であった。本調査の回答者が勤務する学校の地域別の割合は、文部科学省の『平成13年度学校教員統計調査』と比べると若干「近畿」の割合が少ないが、比較的近い分布をしている。



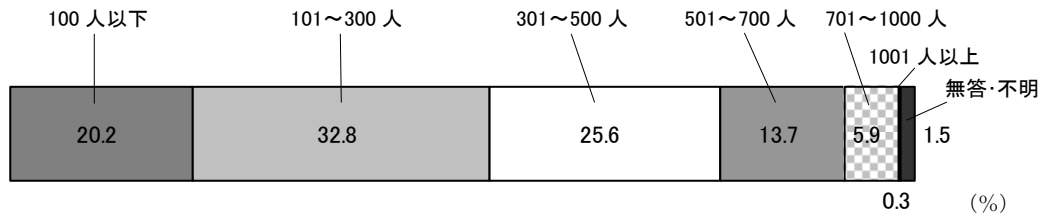
### (2) 勤務校の設置主体

回答者が勤務する学校の設置主体は、「市立」が64.1%、「区立」が2.4%、「町立」が27.3%、「村立」が4.5%、「その他」が0.2%、「無答・不明」が1.4%と、「市立」が6割以上を占めていた。



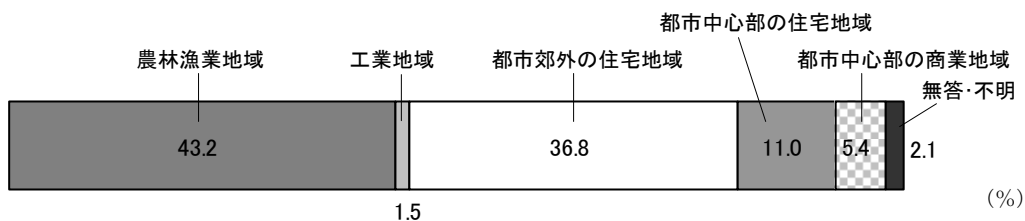
### (3) 児童生徒数

回答者が勤務する学校の児童生徒数は、「100人以下」が20.2%、「101～300人」が32.8%、「301～500人」が25.6%、「501～700人」が13.7%、「701～1000人」が5.9%、「1001人以上」が0.3%、「無答・不明」が1.5%であった。



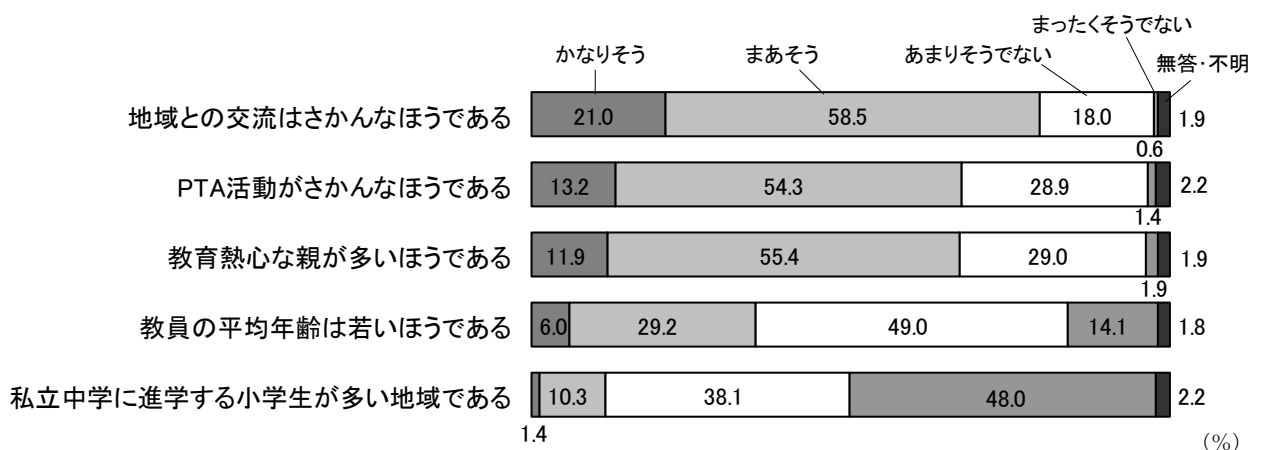
### (4) 勤務校がある地域

回答者が勤務する学校がある地域は、「農林漁業地域」が43.2%、「工業地域」が1.5%、「都市郊外の住宅地域」が36.8%、「都市中心部の住宅地域」が11.0%、「都市中心部の商業地域」が5.4%、「無答・不明」が2.1%であった。



### (5) 勤務校の特徴

回答者の勤務校の特徴をたずねた。「そう」（「かなりそう」と「まあそう」の合計、以下同様）という回答がもっとも多いのは「地域との交流はさかんなほうである」で、79.5%であった。さらに、6割以上が「PTA活動がさかんなほうである」「教育熱心な親が多いほうである」に「そう」と回答している。一方、「教員の平均年齢は若いほうである」に「そう」と回答した教員は35.2%しかいなかった。



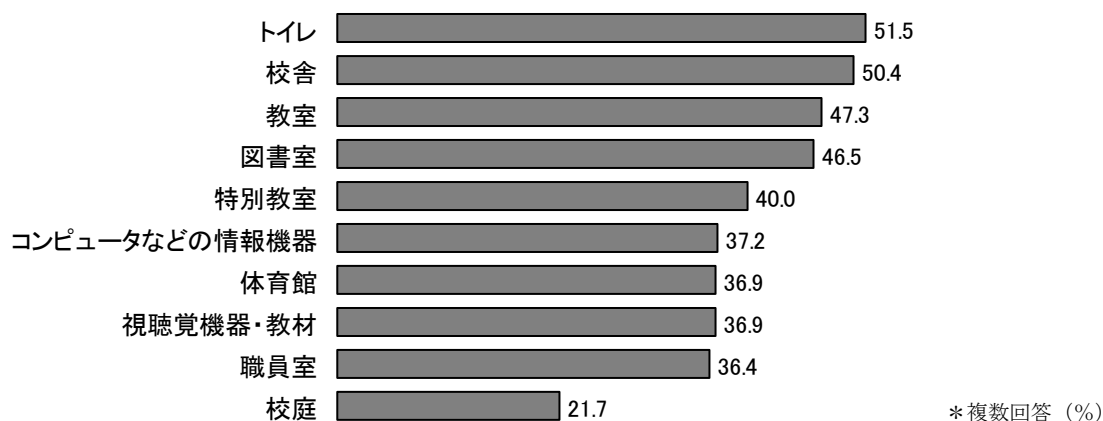
## 5. 学校の施設や設備について

### (1) もっと充実させるべき施設や設備

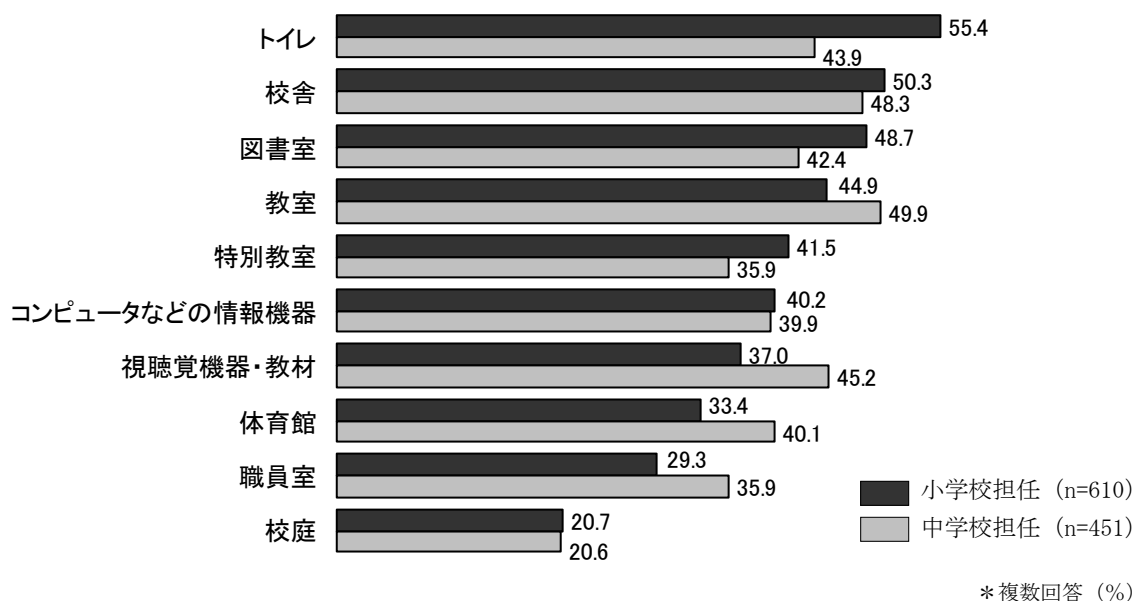
学校の施設や設備について、もっと充実させたり、きれいにしたりした方がよいと思うものがあるかどうかを複数回答形式でたずねた。半数以上の教員がもっと充実させたり、きれいにしたりした方がよいと回答したものは、「トイレ」(51.5%)と「校舎」(50.4%)である。つづいて、「教室」(47.3%)、「図書室」(46.5%)、「特別教室」(40.0%)の順で選択されている。

また、学校段階別で差が大きいものに注目すると、「トイレ」「図書室」などは小学校担任に、もっと充実させるべきだという意見が多かった。また、中学校担任の回答が多かったのは、「視聴覚機器・教材」「体育館」「職員室」であった。

#### ①教員全体



#### ②学校段階別

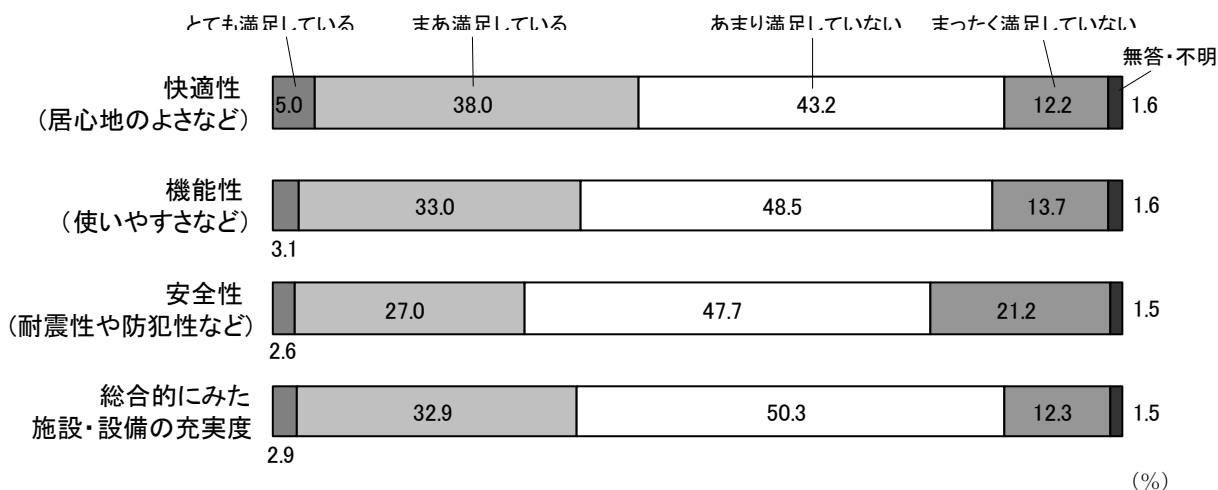


## (2) 学校の施設や設備の満足度

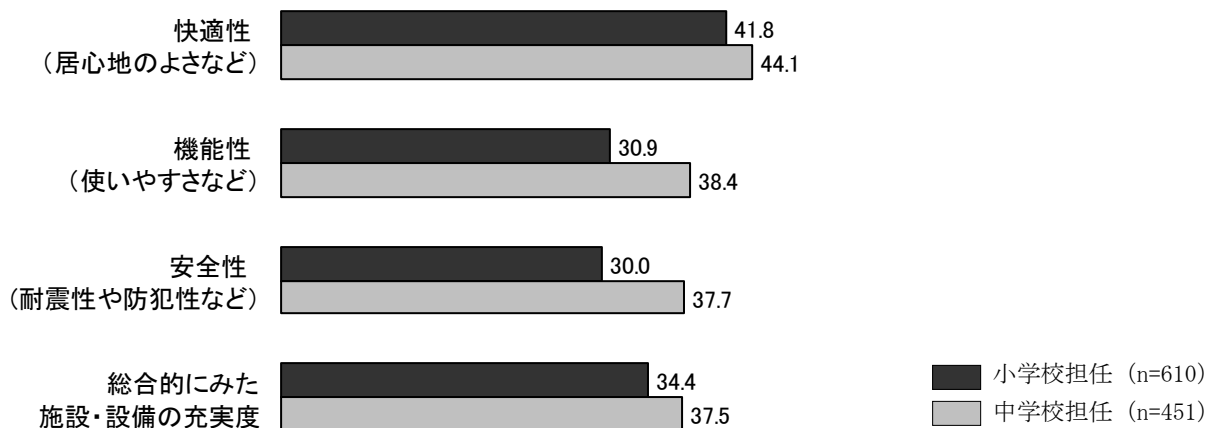
次に、学校の施設や設備に対する満足度をたずねた。全体的に満足度は低く、いずれも5割にも満たない。とくに、満足度が低いのは「安全性（耐震性や防犯性など）」で、「満足している」（「とても満足している」と「まあ満足している」の合計）と回答した教員は29.6%しかいなかった。昨今のさまざまな事件や地震などの自然災害の影響を受けてか、教員の間にも危機意識があることがわかる。さらに、「総合的にみた施設・設備の充実度」に対する満足度も、「満足している」は35.8%で、学校の施設や設備のさらなる充実が望まれているようである。

また、学校段階別にみると、小学校よりも中学校の担任の方が施設や設備に対する全体的な満足度が若干高いようである。「快適性（居心地のよさなど）」「機能性（使いやすさなど）」「安全性（耐震性や防犯性など）」「総合的にみた施設・設備の充実度」のいずれも、中学校担任のほうが小学校担任よりも数ポイント「満足している」の回答が多かった。

### ①教員全体



### ②学校段階別



\* 「とても満足している」と「まあ満足している」の合計 (%)



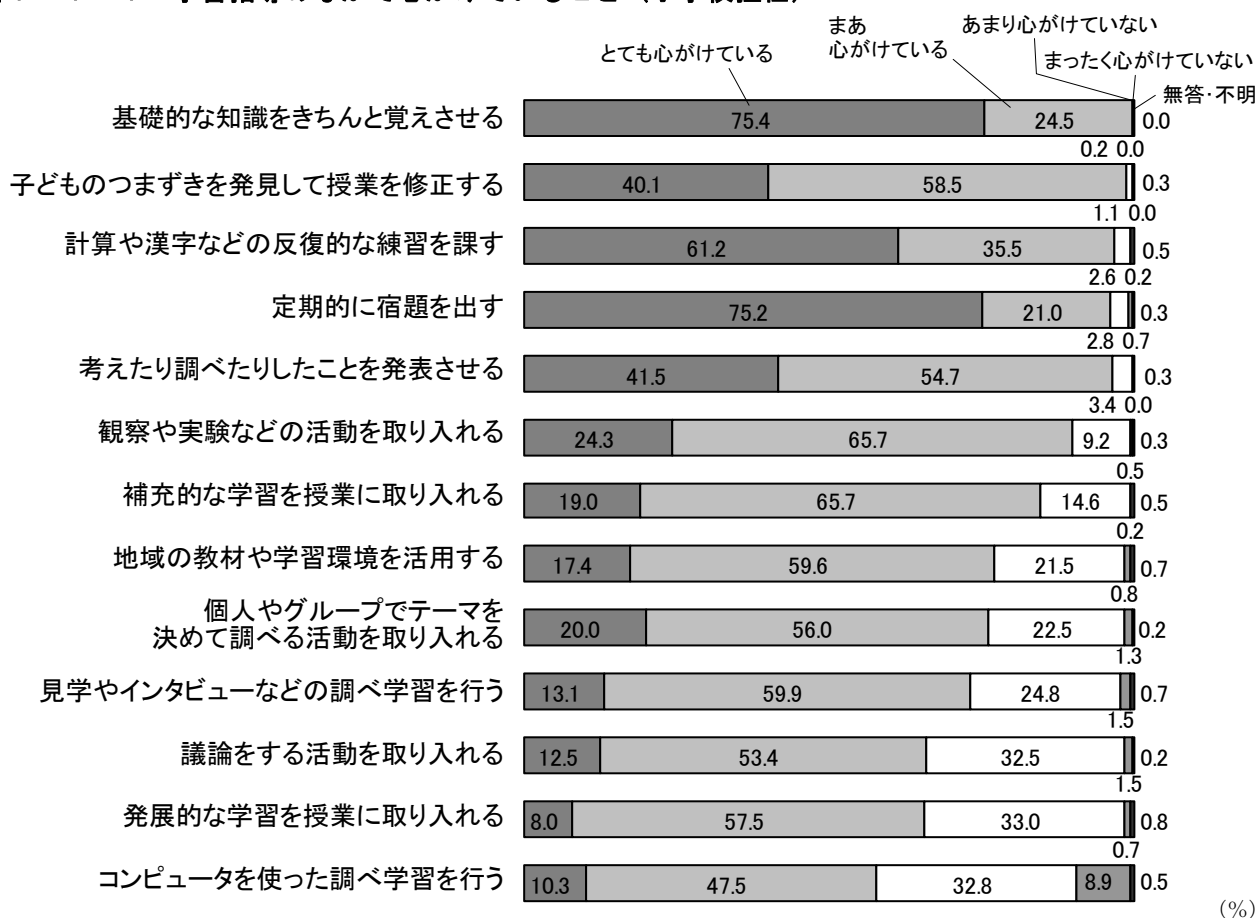
# 1章 学習指導の状況

## 1. 学習指導のなかで心がけていること

本章では、日ごろ、児童生徒の学習指導をしている教員に対して指導の状況をたずねた結果を見ていくことにする。分析にあたっては、担任をしている学年をたずねた項目で「小1」から「小6」の担任をしていると回答した教員をまとめて「小学校担任」、「中1」から「中3」の担任をしていると回答した教員をまとめて「中学校担任」とし、両者の違いにも着目をした。

最初に、小学校担任が日ごろの学習指導のなかで心がけていることを見てみよう。図1-1-1に示した回答結果を見ると、「心がけている」（「とても心がけている」と「まあ心がけている」の合計）という回答が9割を超えるのは、「基礎的な知識をきちんと覚えさせる」（99.9%）、「子どものつまずきを発見して授業を修正する」（98.6%）、「計算や漢字などの反復的な練習を課す」（96.7%）、「定期的に宿題を出す」（96.2%）、「考えたり調べたりしたことを発表させる」（96.2%）、「観察や実験などの活動を入れる」（90.0%）である。そのほかの項目も、「心がけている」という回答は、過半数を超えている。

図1-1-1 学習指導のなかで心がけていること（小学校担任）

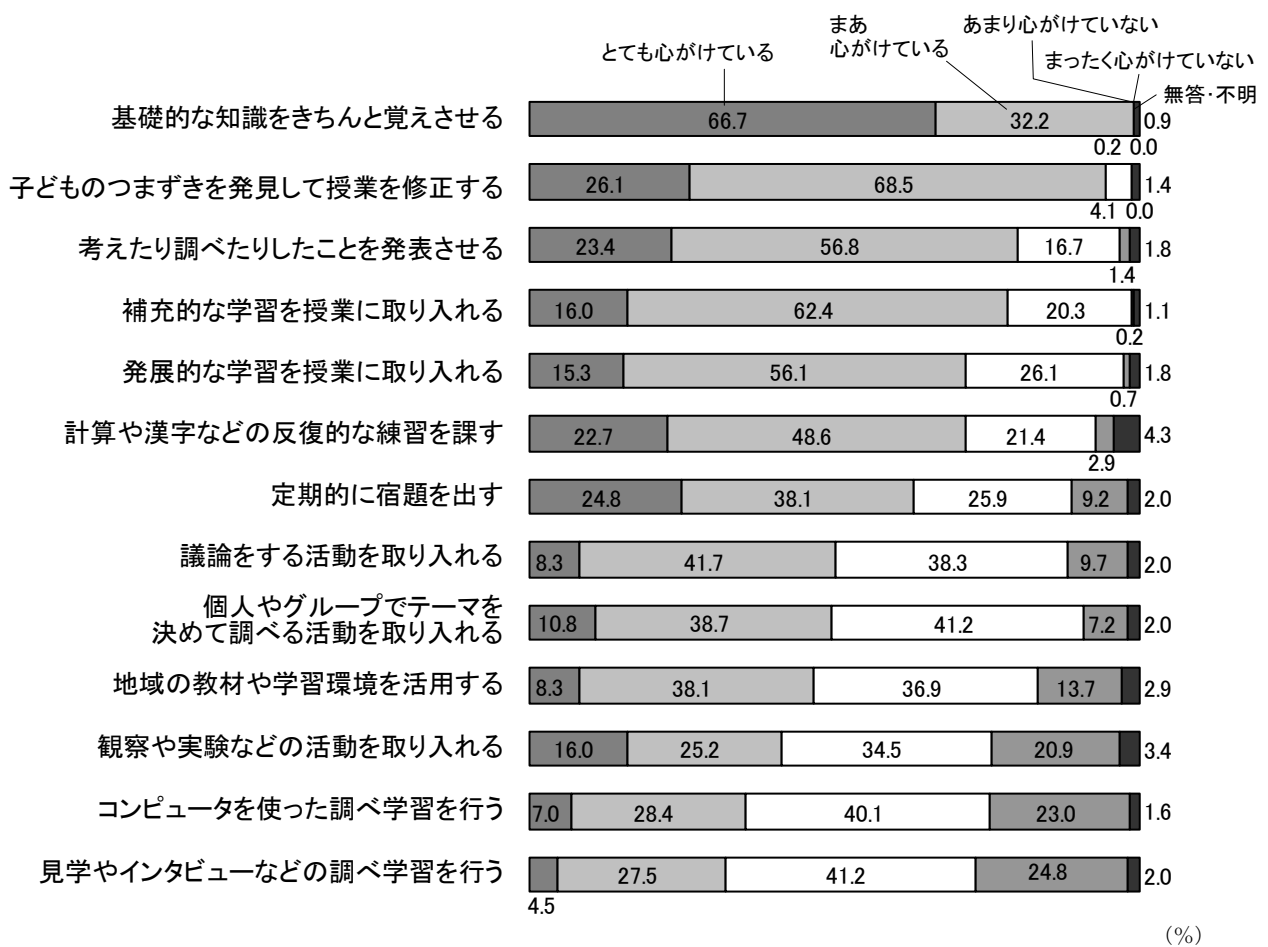


\*日ごろ児童の学習指導をしているとして本設問に回答した小学校担任 (n=609) を母数としている。

つづいて、中学校担任が日ごろの学習指導のなかで、どのようなことを心がけているかを示したのが、**図 1-1-2**である。「心がけている」（「とても心がけている」と「まあ心がけている」の合計）と答えた割合がもっとも多いのは、小学校担任の場合と同様に、「基礎的な知識をきちんと覚えさせる」（99.9%）である。次に、「子どものつまずきを発見して授業を修正する」（94.6%）で、この2項目が9割を超える。

しかし、小学校担任と比べると、全体的に「心がけている」と回答する割合が低い。しかし、これは中学校が教科担任制であることの影響による可能性もある。そこで、次頁以降で、小学校は学年別、中学校は教科担任別に数値を確認する。

**図 1-1-2 学習指導のなかで心がけていること（中学校担任）**



\*日ごろ生徒の学習指導をしているとして本設問に回答した中学校担任（n=444）を母数としている。

小学校教員について、担任をしている学年別に、日ごろの学習指導のなかで心がけていることを見たのが、次の表1-1-1である。これを見ると、「見学やインタビューなどの調べ学習を行う」や「観察や実験などの活動を取り入れる」「地域の教材や学習環境を活用する」といった体験的な学習は、比較的、中学年の担任がよく心がけていることがわかる。また、「発展的な学習を授業に取り入れる」「個人やグループでテーマを決めて調べる活動を取り入れる」「コンピュータを使った調べ学習を行う」「議論をする活動を取り入れる」などは、高学年の担任がよく心がけているようである。

表1-1-1 学習指導のなかで心がけていること（小学校担任・学年別）

	担任している学年					
	小1 (n=95)	小2 (n=94)	小3 (n=91)	小4 (n=87)	小5 (n=107)	小6 (n=135)
基礎的な知識をきちんと覚えさせる	100.0	98.9	100.0	100.0	100.0	100.0
子どものつまづきを発見して授業を修正する	100.0	98.9	96.7	100.0	97.2	98.5
補充的な学習を授業に取り入れる	88.4	84.0	82.4	87.4	86.0	81.5
計算や漢字などの反復的な練習を課す	100.0	98.9	95.6	96.6	93.5	96.3
発展的な学習を授業に取り入れる	64.2	62.8	<u>60.4</u>	64.4	67.3	<b>71.1</b>
個人やグループでテーマを決めて調べる活動を取り入れる	<u>44.2</u>	62.8	80.2	85.1	87.9	<b>89.6</b>
コンピュータを使った調べ学習を行う	<u>22.1</u>	23.4	61.5	70.1	75.7	<b>82.2</b>
見学やインタビューなどの調べ学習を行う	<u>56.8</u>	75.5	<b>83.5</b>	73.6	76.6	72.6
観察や実験などの活動を取り入れる	86.3	<u>77.7</u>	<b>95.6</b>	93.1	95.3	91.1
議論をする活動を取り入れる	60.0	<u>58.5</u>	59.3	65.5	<b>73.8</b>	73.3
地域の教材や学習環境を活用する	76.8	83.0	<b>86.8</b>	72.4	73.8	<u>71.9</u>
考えたり調べたりしたことを発表させる	94.7	94.7	96.7	95.4	96.3	98.5
定期的に宿題を課す	98.9	98.9	96.7	96.6	94.4	93.3

\* 「とても心がけている」と「まあ心がけている」の合計 (%)

\* 日ごろ児童の学習指導をしているとして本設問に回答した小学校担任を母数としている。

\* **ゴチック**は、最大値と最小値の差が10ポイント以上あった項目の最大値を示す。

\* 下線は、最大値と最小値の差が10ポイント以上あった項目の最小値を示す。

次に、中学校教員について、担当している教科別の結果を示したのが表1-1-2である。

これを見ると、教科によって指導で心がけていることが異なることがわかる。たとえば、「国語」の担当教員は、「漢字や計算などの反復的な練習を課す」「議論をする活動を取り入れる」「考えたり調べたりしたことを発表させる」などを強く心がけている。「社会」には、「個人やグループでテーマを決めて調べる活動を取り入れる」「地域の教材や学習環境を活用する」などを心がけている教員が多い。「数学」の担当教員は、「子どものつまずきを発見して授業を修正する」「補充的な学習を授業に取り入れる」などは多いが、調べ学習を心がける教員は少ない。「理科」担当の教員は、「観察や実験などの活動を取り入れる」が多くなっている。このように、中学校の教員は教科によって指導で心がけることが大きく異なるため、小学校担任と中学校担任を安易に比較することは適当でない。

表1-1-2 学習指導のなかで心がけていること（中学校・担当教科別）

	担当教科								
	国語 (n=135)	社会 (n=134)	数学 (n=188)	理科 (n=140)	音楽 (n=49)	美術 (n=38)	保健 体育 (n=95)	技術・ 家庭 (n=65)	外国語 (n=170)
基礎的な知識をきちんと覚えさせる	99.3	99.3	98.9	97.9	<b>100.0</b>	94.7	<u>88.4</u>	98.5	98.2
子どものつまずきを発見して 授業を修正する	94.1	89.6	<b>98.9</b>	92.1	95.9	89.5	<u>84.2</u>	92.3	96.5
補充的な学習を授業に取り入れる	78.5	72.4	<b>86.2</b>	77.9	63.3	<u>57.9</u>	60.0	72.3	80.0
計算や漢字などの 反復的な練習を課す	<b>86.7</b>	51.5	82.4	51.4	55.1	<u>47.4</u>	58.9	49.2	80.0
発展的な学習を授業に取り入れる	68.9	67.9	70.2	68.6	73.5	76.3	<u>63.2</u>	<b>81.5</b>	74.1
個人やグループでテーマを決めて 調べる活動を取り入れる	60.7	<b>74.6</b>	<u>27.7</u>	53.6	59.2	47.4	60.0	63.1	34.7
コンピュータを使った調べ学習を行う	26.7	55.2	<u>20.7</u>	35.0	42.9	31.6	28.4	<b>64.6</b>	21.8
見学やインタビューなどの 調べ学習を行う	35.6	37.3	<u>20.2</u>	22.1	<b>40.8</b>	36.8	24.2	33.8	26.5
観察や実験などの活動を取り入れる	<u>13.3</u>	29.1	39.4	<b>97.9</b>	34.7	55.3	35.8	76.9	18.2
議論をする活動を取り入れる	<b>73.3</b>	65.7	37.8	54.3	<u>26.5</u>	31.6	43.2	30.8	32.9
地域の教材や学習環境を活用する	36.3	<b>76.9</b>	<u>28.2</u>	60.7	53.1	47.4	41.1	55.4	35.3
考えたり調べたりしたことを 発表させる	<b>91.9</b>	91.0	74.5	79.3	77.6	<u>50.0</u>	62.1	83.1	76.5
定期的に宿題を課す	76.3	56.7	76.1	50.7	34.7	31.6	26.3	<u>24.6</u>	<b>82.4</b>

\*「とても心がけている」と「まあ心がけている」の合計(%)。

\*担当教科を回答し、かつ、日ごろ生徒の学習指導をしているとして本設問に回答した中学校教員を母数としている。

\***太ゴチック**は最大値を、**ゴチック**は2番目の値を示す。また、下線は、最小値を示す。

## 2. 総合的な学習の時間

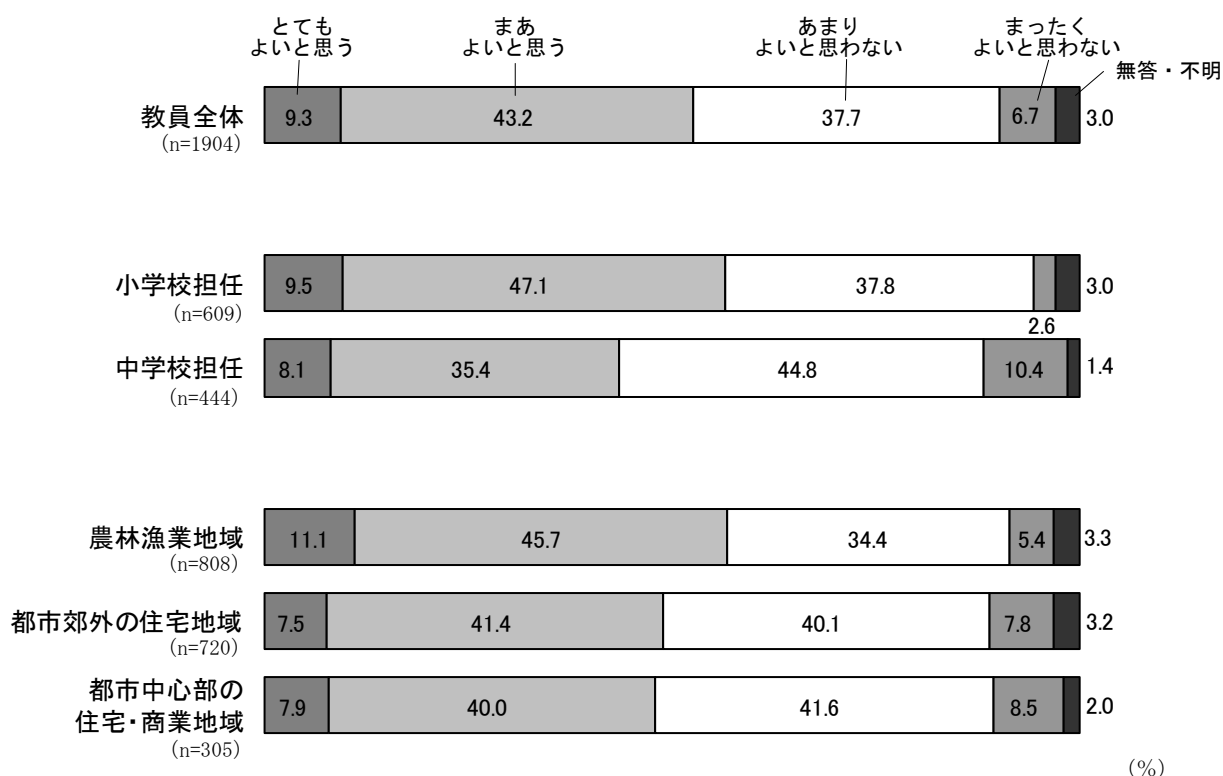
### (1) 取り組みについての評価

「総合的な学習の時間」について、教員はどのように考えているのだろうか。まずは取り組みについての評価から見てみよう（図1-2-1）。なお、本節で扱う「総合的な学習の時間」に関する設問は、日ごろ、児童生徒の学習指導をしている教員のみ回答してもらっている。

「総合的な学習の時間」について「よいと思う」（「とてもよいと思う」と「まあよいと思う」の合計）と答えた割合は全体の52.5%であり、ほぼ半数の教員が「よい」と評価し、「よいと思わない」（「あまりよいと思わない」と「まったくよいと思わない」の合計）の44.4%よりも8.1ポイント多い。また、小学校の担任と中学校の担任の教員の「よいと思う」割合を比較してみると、小学校担任が56.6%、中学校担任が43.5%となっている。

さらに、取り組みへの評価を勤務校がある地域別に見ると、「農林漁業地域」に勤務する教員は、「都市郊外の住宅地域」および「都市中心部の住宅・商業地域」に勤務する教員よりも「総合的な学習の時間」への評価が若干高いようである。

図1-2-1 「総合的な学習の時間」の取り組みについての評価（学校段階別、地域別）

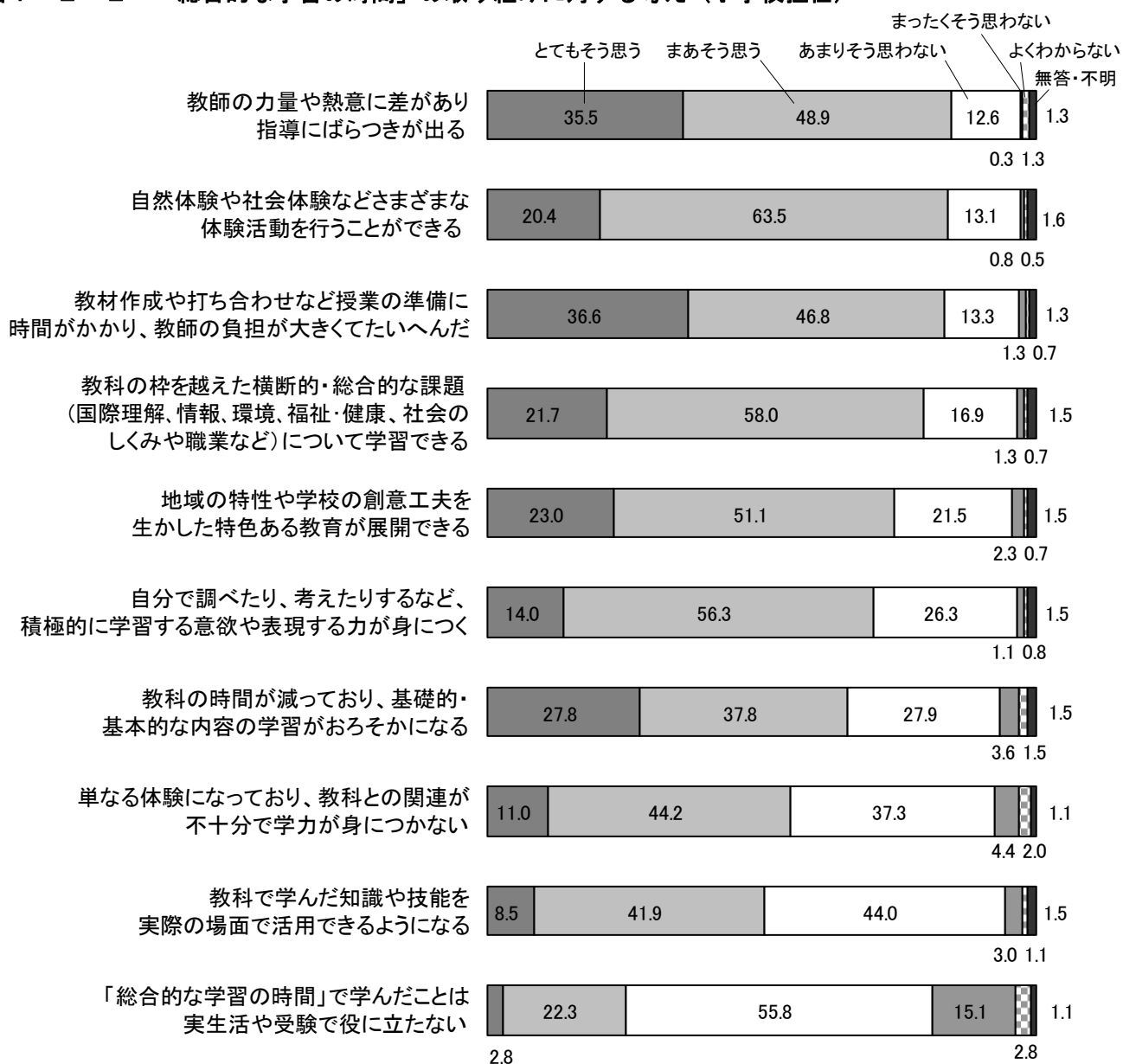


\* 日ごろ児童生徒の学習指導をしているとして本設問に回答した教員を母数としている。

(2) 取り組みに対する考え

次に、「総合的な学習の時間」の取り組みについて思うことをたずねた。図1-2-2は、小学校担任の回答結果である。「そう思う」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計）と答えた割合を見ると、「教師の力量や熱意に差があり指導にばらつきが出る」（84.4%）がもっとも多い。次いで、「自然体験や社会体験などさまざまな体験活動を行うことができる」（83.9%）、「教材作成や打ち合わせなど授業の準備に時間がかかり、教師の負担が大きくてたいへんだ」（83.4%）、「教科の枠を越えた横断的・総合的な課題（国際理解、情報、環境、福祉・健康、社会のしくみや職業など）について学習できる」（79.7%）などとなっている。

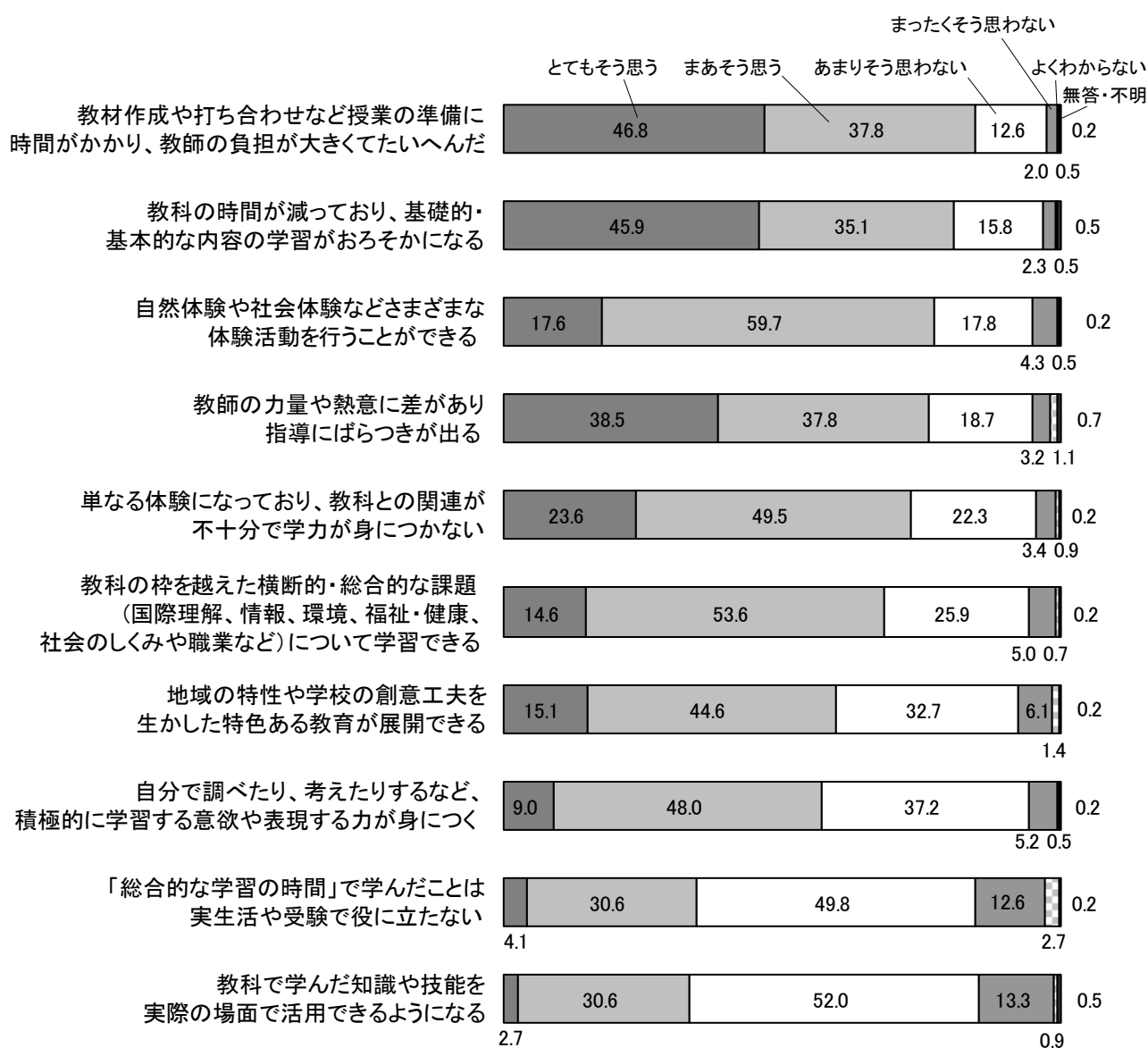
図1-2-2 「総合的な学習の時間」の取り組みに対する考え（小学校担任）



\*日ごろ児童の学習指導をしているとして本設問に回答した小学校担任（n=609）を母数としている。（%）

小学校担任に対してと同様に、中学校担任にも「総合的な学習の時間」の取り組みについて聞いたところ（図1-2-3）、「そう思う」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計）と答えた割合がもっとも高いのは、「教材作成や打ち合わせなど授業の準備に時間がかかり、教師の負担が大きくてたいへんだ」（84.6%）であった。次いで、「教科の時間が減っており、基礎的・基本的な内容の学習がおろそかになる」（81.0%）、「自然体験や社会体験などさまざまな体験活動を行うことができる」（77.3%）、「教師の力量や熱意に差があり指導にばらつきが出る」（76.3%）となっている。

図1-2-3 「総合的な学習の時間」の取り組みに対する考え（中学校担任）



\* 日ごろ生徒の学習指導をしているとして本設問に回答した中学校担任（n=444）を母数としている。（%）

さらに、小学校教員については担当学年別、中学校教員については担当教科別に、「そう思う」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計）の割合を見てみよう。

表1-2-1からは、とくに顕著な傾向は見られない。わずかだが、小学5年生を担当する教員が「総合的な学習の時間」を肯定的にとらえる傾向を示し、「自分で調べたり、考えたりするなど、積極的に学習する意欲や表現する力が身につく」「教科の枠を越えた横断的・総合的な課題（国際理解、情報、環境、福祉・健康、社会のしくみや職業など）について学習できる」「教科で学んだ知識や技能を実際の場面で活用できるようになる」など肯定的な項目で「そう思う」という比率が高く、「『総合的な学習の時間』で学んだことは実生活や受験で役に立たない」という否定的な項目で「そう思う」の比率が低くなっている。

表1-2-1 「総合的な学習の時間」の取り組みに対する考え（小学校担任・学年別）

	担任している学年					
	小1 (n=95)	小2 (n=94)	小3 (n=91)	小4 (n=87)	小5 (n=107)	小6 (n=135)
自分で調べたり、考えたりするなど、積極的に学習する意欲や表現する力が身につく	62.1	72.3	69.2	70.1	75.7	71.1
教科の枠を越えた横断的・総合的な課題(国際理解、情報、環境、福祉・健康、社会のしくみや職業など)について学習できる	69.5	77.7	78.0	83.9	88.8	79.3
地域の特性や学校の創意工夫を生かした特色ある教育が展開できる	69.5	78.7	72.5	69.0	75.7	77.0
自然体験や社会体験などさまざまな体験活動を行うことができる	82.1	87.2	85.7	82.8	83.2	83.0
教科で学んだ知識や技能を実際の場面で活用できるようになる	44.2	51.1	44.0	48.3	57.0	54.8
教師の力量や熱意に差があり指導にばらつきが出る	82.1	85.1	82.4	80.5	86.0	88.1
単なる体験になっており、教科との関連が不十分で学力が身につかない	60.0	48.9	60.4	48.3	50.5	60.7
教科の時間が減っており、基礎的・基本的な内容の学習がおろそかになる	63.2	64.9	62.6	62.1	65.4	71.9
「総合的な学習の時間」で学んだことは実生活や受験で役に立たない	28.4	23.4	28.6	23.0	21.5	25.9
教材作成や打ち合わせなど授業の準備に時間がかかり、教師の負担が大きくてたいへんだ	78.9	88.3	86.8	81.6	79.4	85.2

\* 「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計 (%)

\* 日ごろ児童の学習指導をしているとして本設問に回答した小学校担任を母数としている。

\* **太ゴチック** は最大値を、**ゴチック** は2番目の値を示す。また、下線は、最小値を示す。



次に、中学校教員の担当教科別に「総合的な学習の時間」の取り組みに対する考えを示した（表1-2-2）。表からは、「美術」を担当する教員が、「総合的な学習の時間」を肯定的にとらえている様子が見えてくる。ただし、「美術」及び「音楽」を担当する教員は、サンプル数が少ない点を配慮する必要がある。また、「保健体育」の教員は、肯定的な項目に対して「そう思う」と回答する比率が低いが、これも「総合的な学習の時間」を直接担当していない可能性を考慮する必要がある。

比較的サンプル数の多い「国語」「社会」「数学」「理科」「外国語」の5教科を見てみると、最大値と最小値の差が10ポイントに満たない項目が多く、差は小さい。この5教科のなかで10ポイント以上差が開いている項目は「教科で学んだ知識や技能を実際の場面で活用できるようになる」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計：国語40.7%、社会38.1%、数学29.8%、理科33.6%、外国語40.6%）の1項目だけである。

表1-2-2 「総合的な学習の時間」の取り組みに対する考え（中学校・担当教科別）

	担当教科								
	国語 (n=135)	社会 (n=134)	数学 (n=188)	理科 (n=140)	音楽 (n=49)	美術 (n=38)	保健 体育 (n=95)	技術・ 家庭 (n=65)	外国語 (n=170)
自分で調べたり、考えたりするなど、積極的に学習する意欲や表現する力が身につく	55.6	64.9	64.9	58.6	53.1	<b>71.1</b>	<u>51.6</u>	53.8	59.4
教科の枠を越えた横断的・総合的な課題（国際理解、情報、環境、福祉・健康、社会のしくみや職業など）について学習できる	65.9	67.9	69.7	71.4	73.5	<b>78.9</b>	<u>56.8</u>	70.8	74.7
地域の特性や学校の創意工夫を生かした特色ある教育が展開できる	64.4	67.9	70.7	62.1	65.3	<b>84.2</b>	<u>47.4</u>	63.1	65.9
自然体験や社会体験などさまざまな体験活動を行うことができる	79.3	81.3	87.2	80.7	81.6	<b>89.5</b>	<u>72.6</u>	86.2	78.8
教科で学んだ知識や技能を実際の場面で活用できるようになる	40.7	38.1	29.8	33.6	34.7	<b>50.0</b>	<u>29.5</u>	32.3	40.6
教師の力量や熱意に差があり指導にばらつきが出る	74.8	77.6	73.4	76.4	75.5	<u>65.8</u>	71.6	<b>80.0</b>	77.6
単なる体験になっており、教科との関連が不十分で学力が身につかない	68.1	75.4	69.7	71.4	<b>75.5</b>	<u>44.7</u>	65.3	75.4	72.9
教科の時間が減っており、基礎的・基本的な内容の学習がおろそかになる	77.8	78.4	74.5	<b>82.9</b>	75.5	<u>55.3</u>	78.9	76.9	81.2
「総合的な学習の時間」で学んだことは実生活や受験で役に立たない	29.6	35.8	28.7	<b>37.9</b>	34.7	<u>18.4</u>	35.8	26.2	31.2
教材政策や打ち合わせなど授業の準備に時間がかかり、教師の負担が大きくてたいへんだ	85.9	82.1	86.2	85.7	85.7	81.6	<u>81.1</u>	81.5	<b>88.8</b>

\* 「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計（%）

\* 担当教科を回答し、かつ、日ごろ生徒の学習指導をしているとして本設問に回答した中学校教員を母数としている。

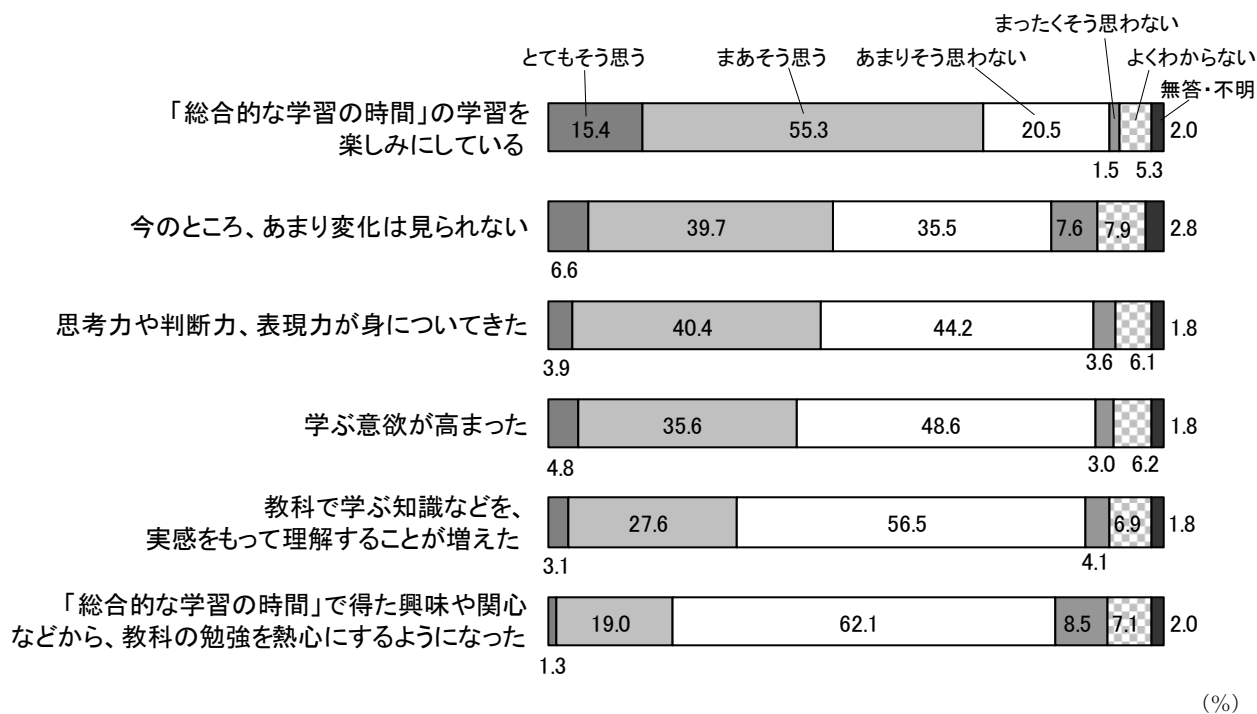
\* **太ゴチック** は最大値を、**ゴチック**は2番目の値を示す。また、下線は、最小値を示す。

### (3) 「総合的な学習の時間」による児童生徒の変化

つづいて、「総合的な学習の時間」での学習や活動の結果として、児童生徒が実施前と比べてどう変化したかをたずねた。図1-2-4は、小学校担任の回答結果である。

『総合的な学習の時間』の学習を楽しみにしている」に対して「そう思う」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計）と答えた比率は70.7%で、多くの小学校担任は「総合的な学習の時間」が児童によって好意的に受け入れられているととらえている。しかし、「今のところ、あまり変化は見られない」に対して半数近く（46.3%）が「そう思う」と回答している。さらに、「教科で学ぶ知識などを、実感をもって理解することが増えた」や『総合的な学習の時間』で得た興味や関心などから、教科の勉強を熱心にするようになった」などの効果を問う項目に対して、「そう思わない」（「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」の合計）と回答する比率がそれぞれ60.6%、70.6%となっている。また、小学校担任は、「よくわからない」という回答がそれぞれの項目で6%前後あり、中学校担任に比べると多い。

図1-2-4 「総合的な学習の時間」による児童生徒の変化（小学校担任）

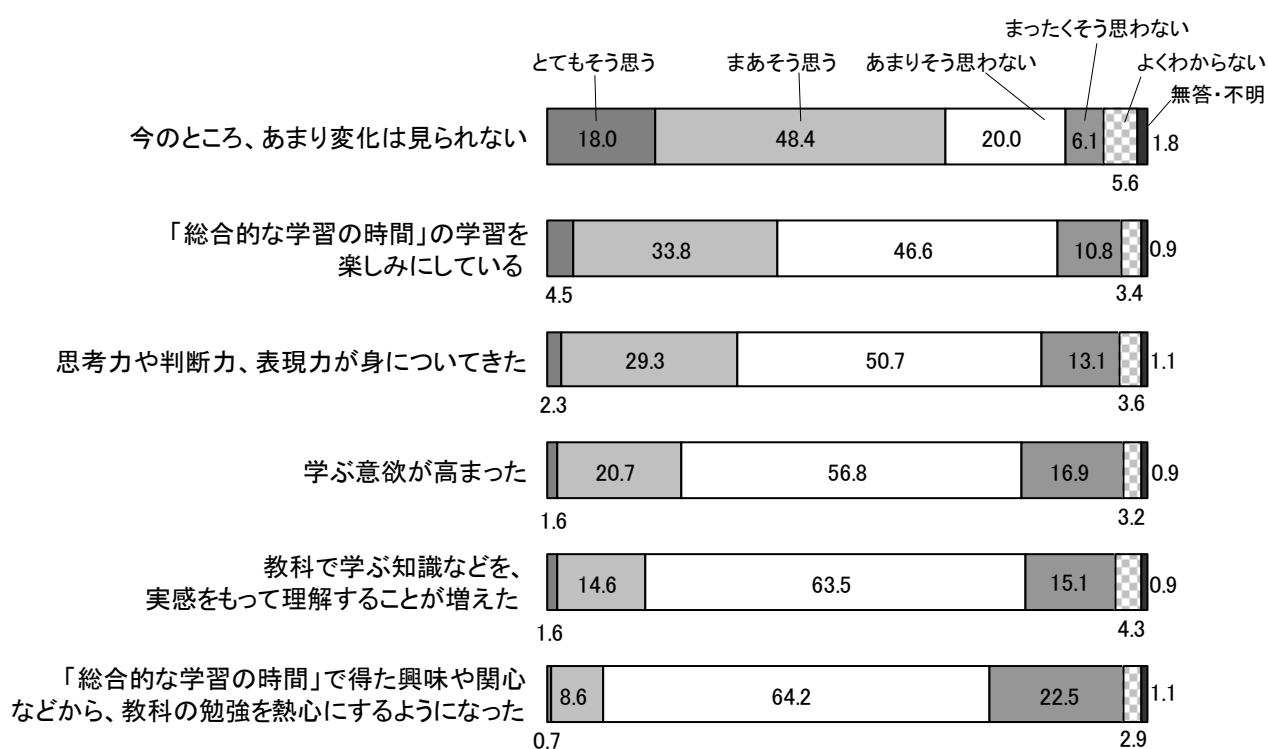


\*日ごろ児童の学習指導をしているとして本設問に回答した小学校担任（n=609）を母数としている。

「総合的な学習の時間」の学習や活動で生徒がどう変化したかについて中学校担任の回答（図1-2-5）をみると、傾向としては小学校担任のよりも積極的な評価はしていない様子が見られる。

「今のところ、あまり変化は見られない」に対して、66.4%が「そう思う」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計）と答えている。「『総合的な学習の時間』の学習を楽しみにしている」に対して「そう思う」と答えた割合は38.3%で、中学校担任は「総合的な学習の時間」が生徒にあまり好まれていないととらえている。また、「教科で学ぶ知識などを、実感をもって理解することが増えた」や「『総合的な学習の時間』で得た興味や関心などから、教科の勉強を熱心にするようになった」などの項目に対して、「そう思わない」（「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」の合計）と回答する割合がそれぞれ78.6%、86.7%となっている。

図1-2-5 「総合的な学習の時間」による児童生徒の変化（中学校担任）



(%)

\* 日ごろ生徒の学習指導をしているとして本設問に回答した中学校担任 (n=444) を母数としている。

小学校担任と中学校担任の回答結果を「そう思う」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計）と答えた比率について比べてみたのが、**図1-2-6**である。

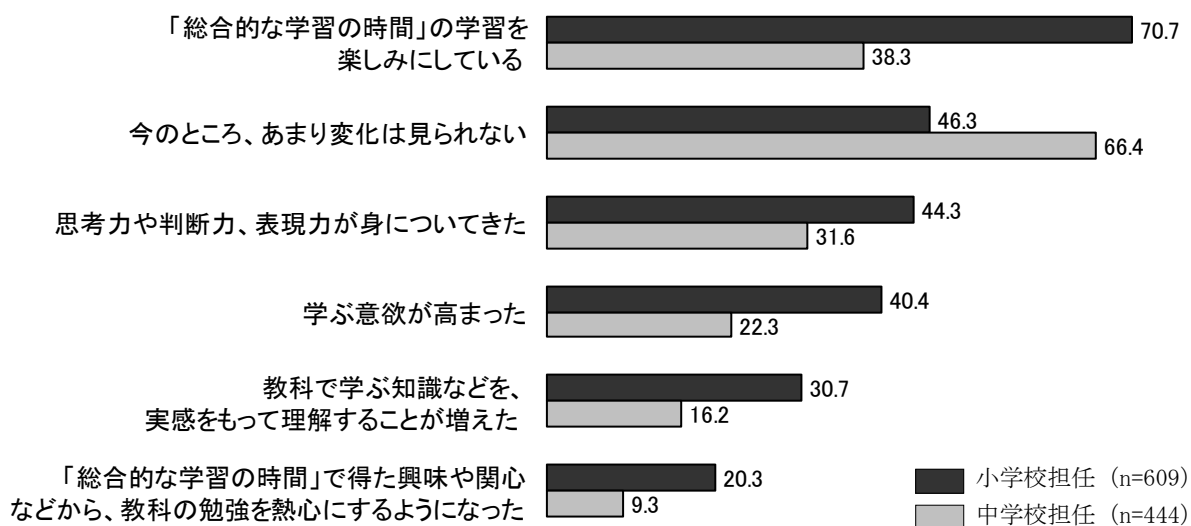
『総合的な学習の時間』の学習を楽しみにしている」「学ぶ意欲が高まった」「教科で学ぶ知識などを、実感をもって理解することが増えた」「総合的な学習の時間」で得た興味や関心などから、教科の勉強を熱心にするようになった」の項目をみると、中学校担任の「そう思う」という回答が際立って少ないことがわかる。中学校担任の意見としては、「総合的な学習の時間」による生徒の変化は、「今のところ、あまり見られない」（66.4%）とするものがもっとも多い。このように、「総合的な学習の時間」の効果については小学校担任と中学校担任の間に認識の違いが見られる。

さらに、小学校担任については担当学年別に、中学校担任については担当教科別に、「そう思う」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計）の比率を検討した。

結果としては、小学校担任では「総合的な学習の時間」による児童生徒の変化の様子について、学年による一定の傾向を見ることはできなかった（図表省略）。

また、中学校担任の担当教科別に見た結果では、表1-2-2と同様に、「美術」を担当する教員が「総合的な学習の時間」の成果を積極的に評価している様子がうかがえた。しかし、サンプル数が比較的多い「国語」「社会」「数学」「理科」「外国語」を見てみると、担当教科による差異は大きくなかった（図表省略）。

**図1-2-6 「総合的な学習の時間」による児童生徒の変化（学校段階別）**



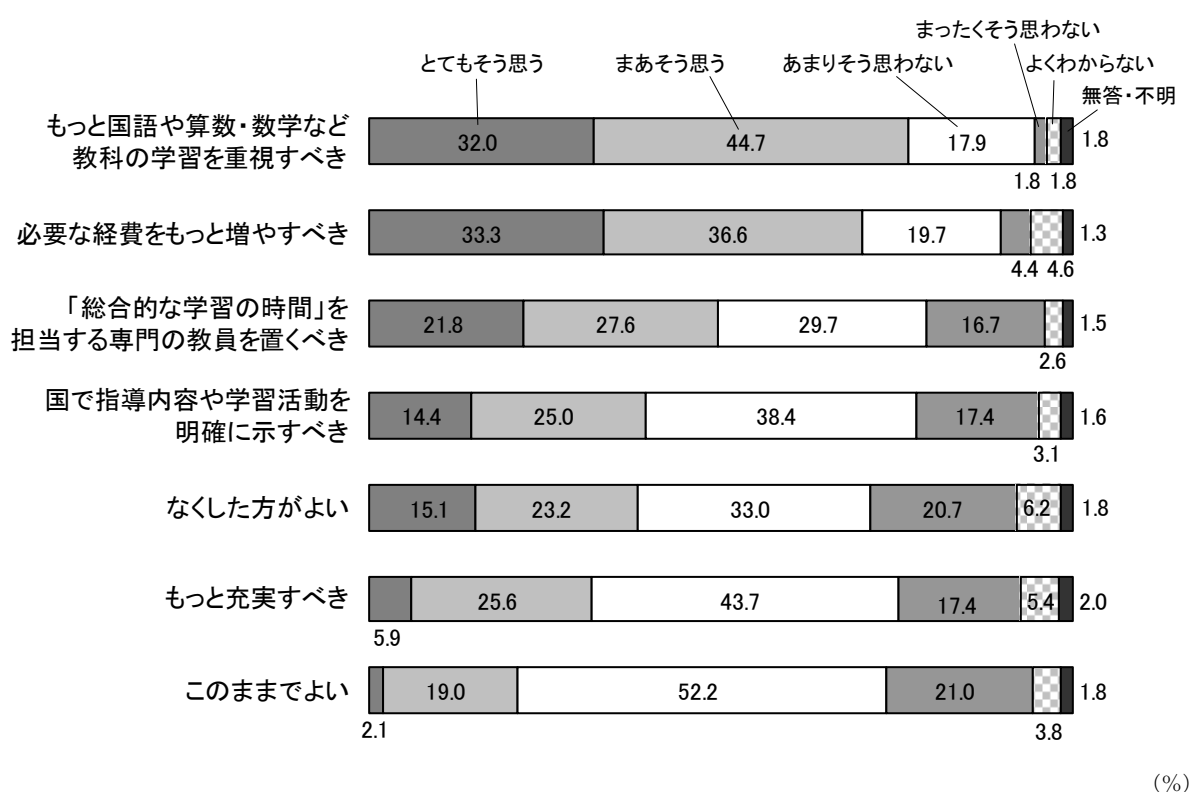
\* 「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計 (%)

\* 日ごろ生徒の学習指導をしているとして本設問に回答した教員を母数としている。

(4) 「総合的な学習の時間」についての意見

さらに、「総合的な学習の時間」に関する設問の最後に、今後どのようにすればよいと思うか意見をたずねた。図1-2-7は、小学校担任の回答結果である。「このままでよい」という意見は少数派で、「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせても、およそ2割にすぎない。「そう思う」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計）割合がもっとも高いのが、「もっと国語や算数・数学など教科の学習を重視すべき」（76.7%）であり、次に、「必要な経費をもっと増やすべき」（69.9%）である。半数以上が「そう思う」と回答しているのは、この2項目である。

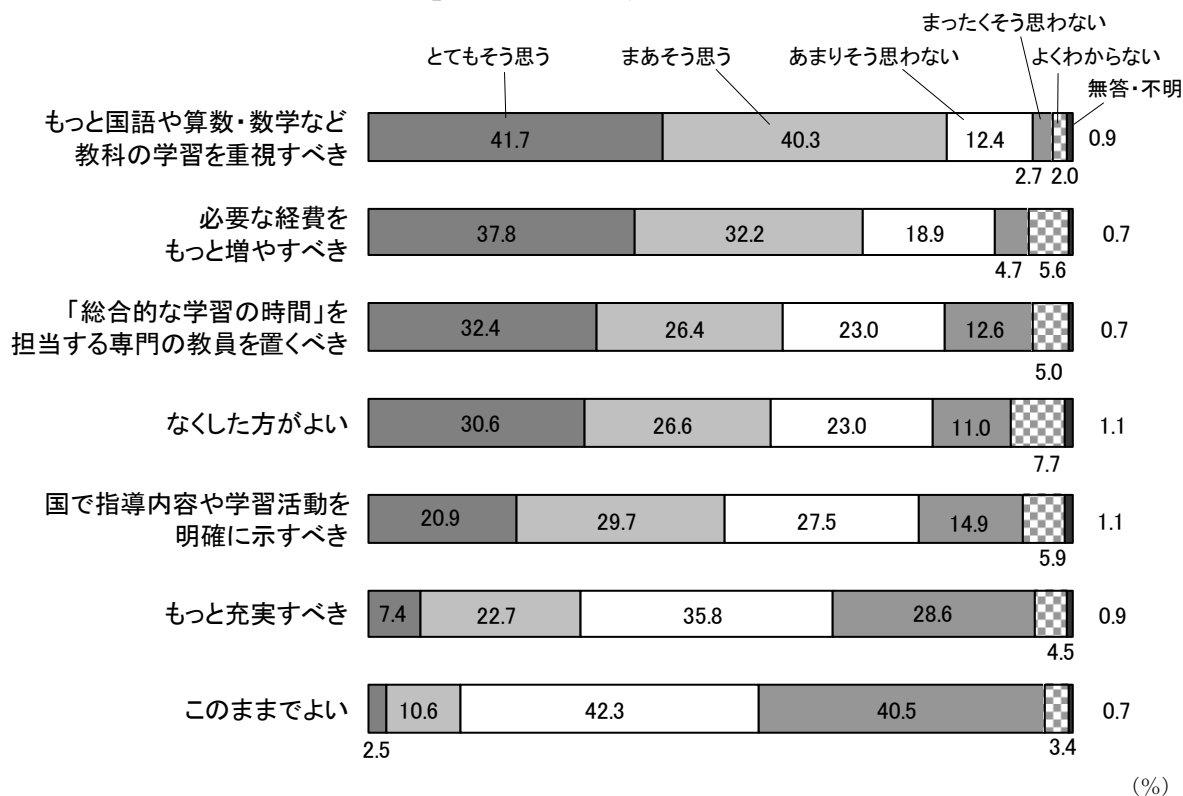
図1-2-7 「総合的な学習の時間」についての意見（小学校担任）



\* 日ごろ児童の学習指導をしているとして本設問に回答した小学校担任（n=609）を母数としている。

次に中学校担任の回答結果を見てみよう（図1-2-8）。「このままでよい」という意見は、小学校担任と比べるとさらに少数で、「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせても、およそ1割である。「そう思う」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計）の比率を見ると、「もっと国語や算数・数学など教科の学習を重視すべき」（82.0%）、「必要な経費をもっと増やすべき」（70.0%）、「『総合的な学習の時間』を担当する専門の教員を置くべき」（58.8%）、「国で指導内容や学習活動を明確に示すべき」（50.6%）となっており、「なくした方がよい」との回答も57.2%である。

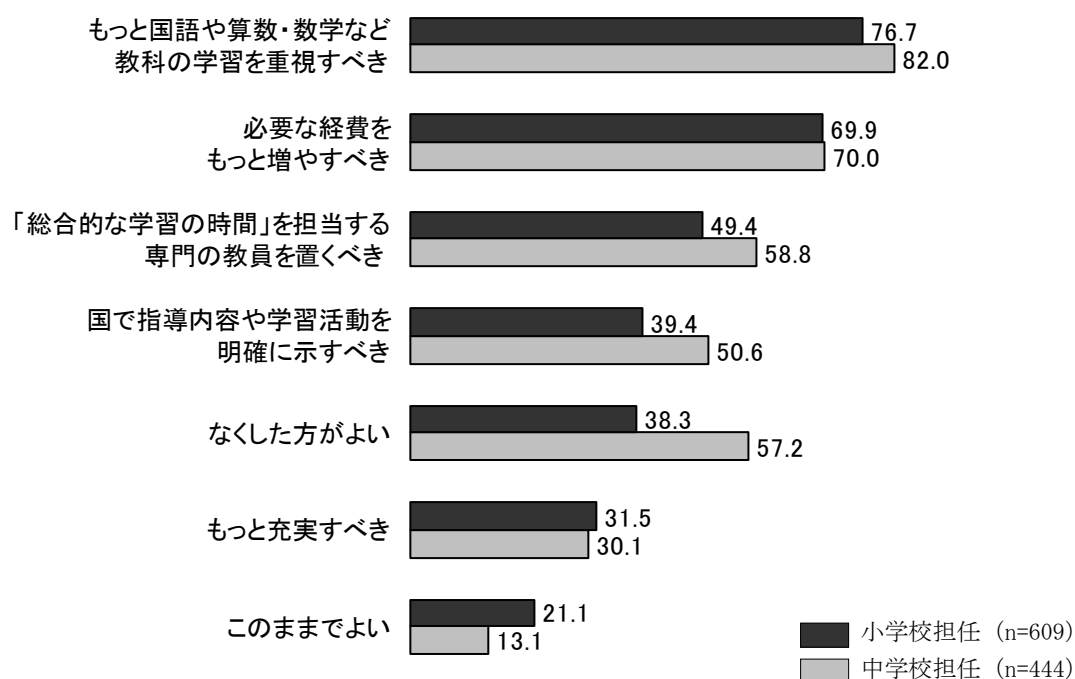
図1-2-8 「総合的な学習の時間」についての意見（中学校担任）



\* 日ごろ生徒の学習指導をしているとして本設問に回答した中学校担任（n=444）を母数としている。

以上で見てきた小学校担任と中学校担任の意見について、「そう思う」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計）の割合を比較したのが、**図1-2-9**である。小学校担任も中学校担任も、「もっと国語や算数・数学など教科の学習を重視すべき」という回答がもっとも多く、次いで、「必要な経費をもっと増やすべき」が多い。「なくした方がよい」という回答は、中学校担任に多い。

**図1-2-9 「総合的な学習の時間」についての意見（学校段階別）**



\* 「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計 (%)

\* 日ごろ生徒の学習指導をしているとして本設問に回答した教員を母数としている。

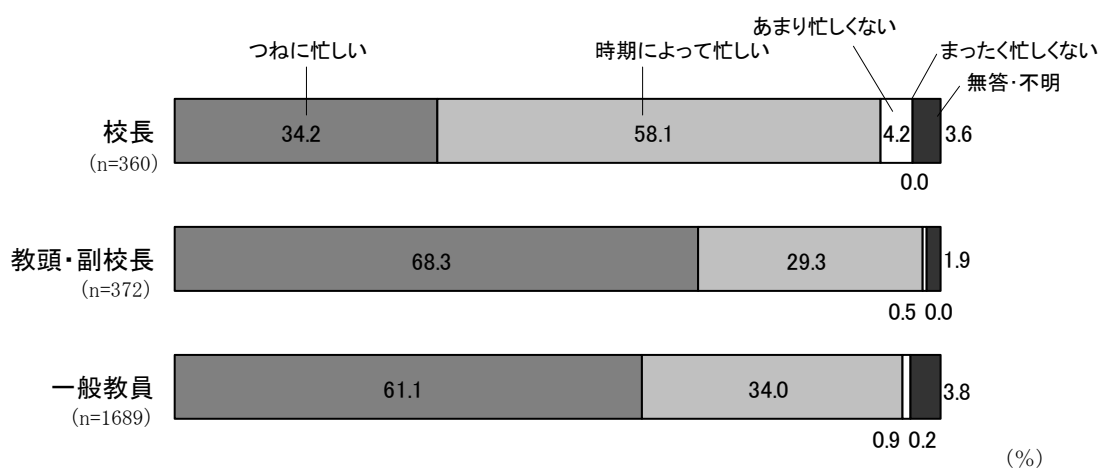
## 2章 職務の状況

### 1. 職務の忙しさ

現在、学校の教員はどれくらい忙しいと感じているのだろうか。ここでは、調査対象となったすべての教員に対して、自身の職務をどれくらい忙しいと感じているかたずねた（図2-1-1）。「教頭・副校長」の68.3%、「一般教員※」の61.1%が、「つねに忙しい」と回答している。「校長」の多くは、「時期によって忙しい」（58.1%）と回答しており、「あまり忙しくない」と回答した校長も4.2%いる。

※「一般教員」＝職名をたずねる設問で、「1. 校長」「2. 教頭・副校長」「3. それ以外の教員」のうち、「3」を選じた教員を、以下では一般教員と表記する。

図2-1-1 職務の忙しさ



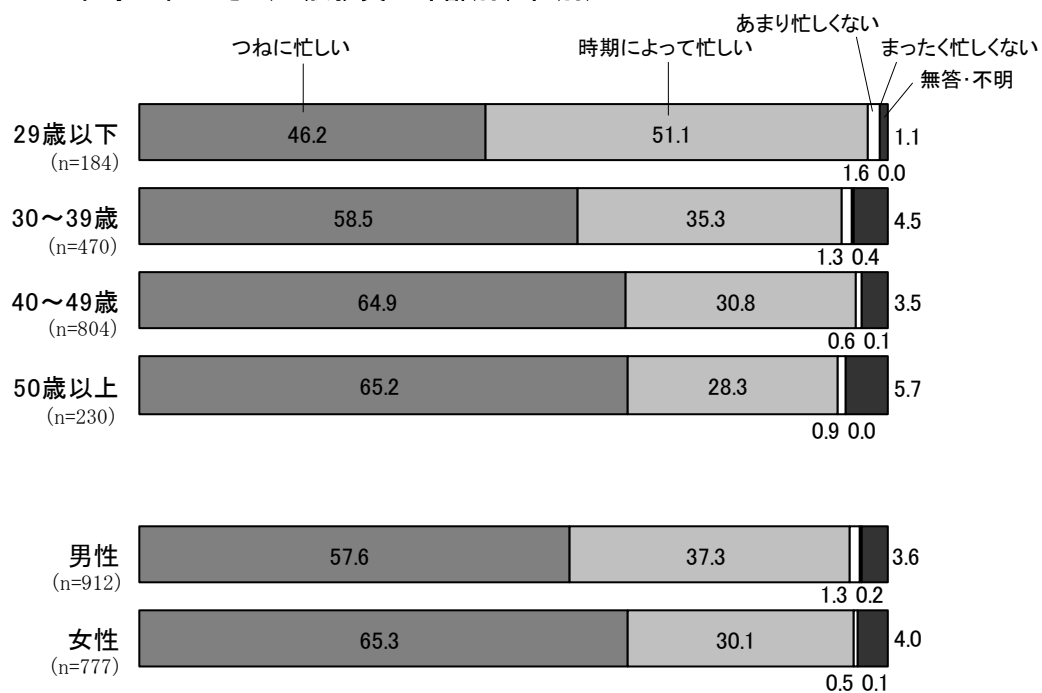


さらに、一般教員に限って忙しさを年齢別と性別に見たのが、**図2-1-2**である。

最初に、年齢による忙しさの違いであるが、「つねに忙しい」と感じているのは「40～49歳」(64.9%)、「50歳以上」(65.2%)であり、「29歳以下」の若年層では、「時期によって忙しい」という回答が半数を占める。

また、一般教員を男女別に見ると、「つねに忙しい」と回答する比率は「男性」57.6%、「女性」65.3%となっており、女性のほうが忙しさを感じている割合が高い。

**図2-1-2 仕事の忙しさ（一般教員の年齢別、性別）**



(%)

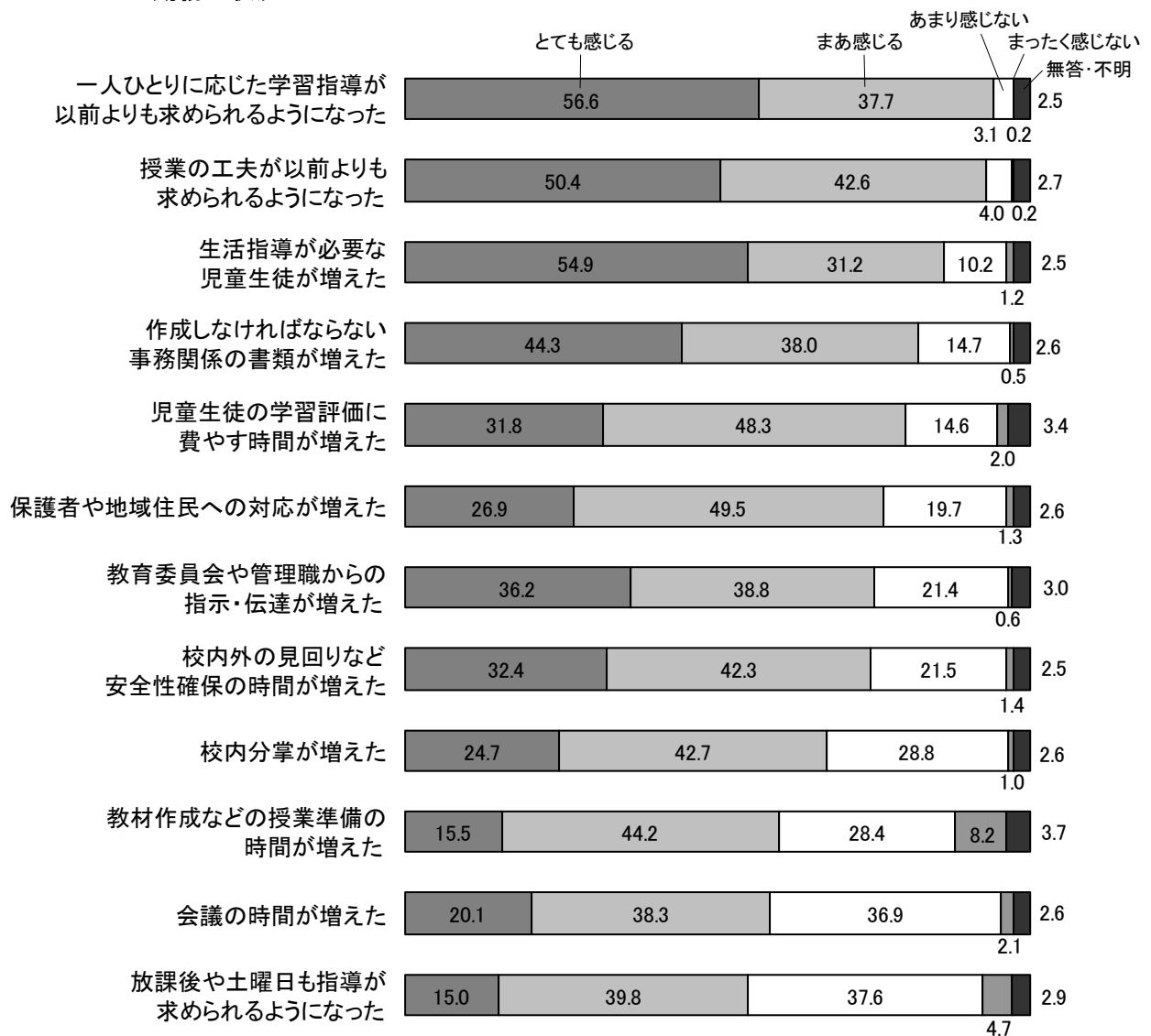
## 2. 勤務の状況

図2-2-1は、「勤務していて、次のように感じることもあるか」という質問に対する教員全体の回答結果である。

「感じる」ことの割合が多い項目は、「一人ひとりに応じた学習指導が以前よりも求められるようになった」（「とても感じる」と「まあ感じる」の合計：94.3%、以下同様）、「授業の工夫が以前よりも求められるようになった」（93.0%）、「生活指導が必要な児童生徒が増えた」（86.1%）、「作成しなければならない事務関係の書類が増えた」（82.3%）、「児童生徒の学習評価に費やす時間が増えた」（80.1%）などであり、これらは8割を超える。

総合的に見るとすべての項目に対して、「感じる」と回答する教員が半数を超えている。

図2-2-1 勤務の状況



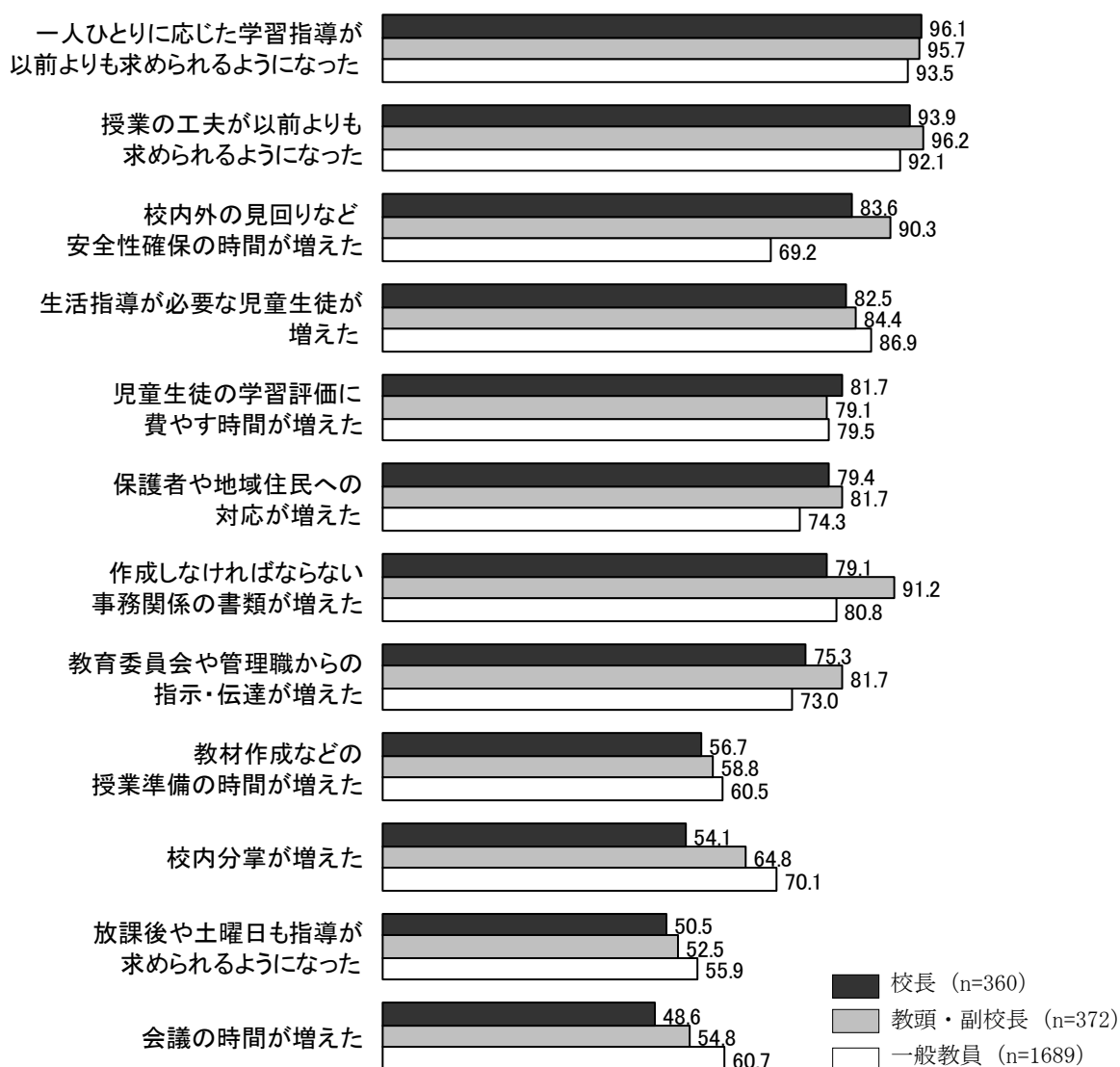
(%)

次に、この勤務の状況について、職階による差を確認しよう。図2-2-2は、次のようなことを「感じる」（「とても感じる」と「まあ感じる」の合計）と回答した比率について、校長、教頭・副校長、一般教員の別に見たものである。

全般的に教頭・副校長で数値の高い項目が多く、「校内外の見回りなど安全性確保の時間が増えた」（90.3%）、「保護者や地域住民への対応が増えた」（81.7%）、「作成しなければならない事務関係の書類が増えた」（91.2%）、「教育委員会や管理職からの指示・伝達が増えた」（81.7%）などで、校長や一般教員よりも高い比率を示している。

一般教員は、「生活指導が必要な児童生徒が増えた」（86.9%）、「教材作成などの授業準備の時間が増えた」（60.5%）、「校内分掌が増えた」（70.1%）、「放課後や土曜日にも指導が求められるようになった」（55.9%）、「会議の時間が増えた」（60.7%）などで、他の職階よりも「感じる」比率が高い。

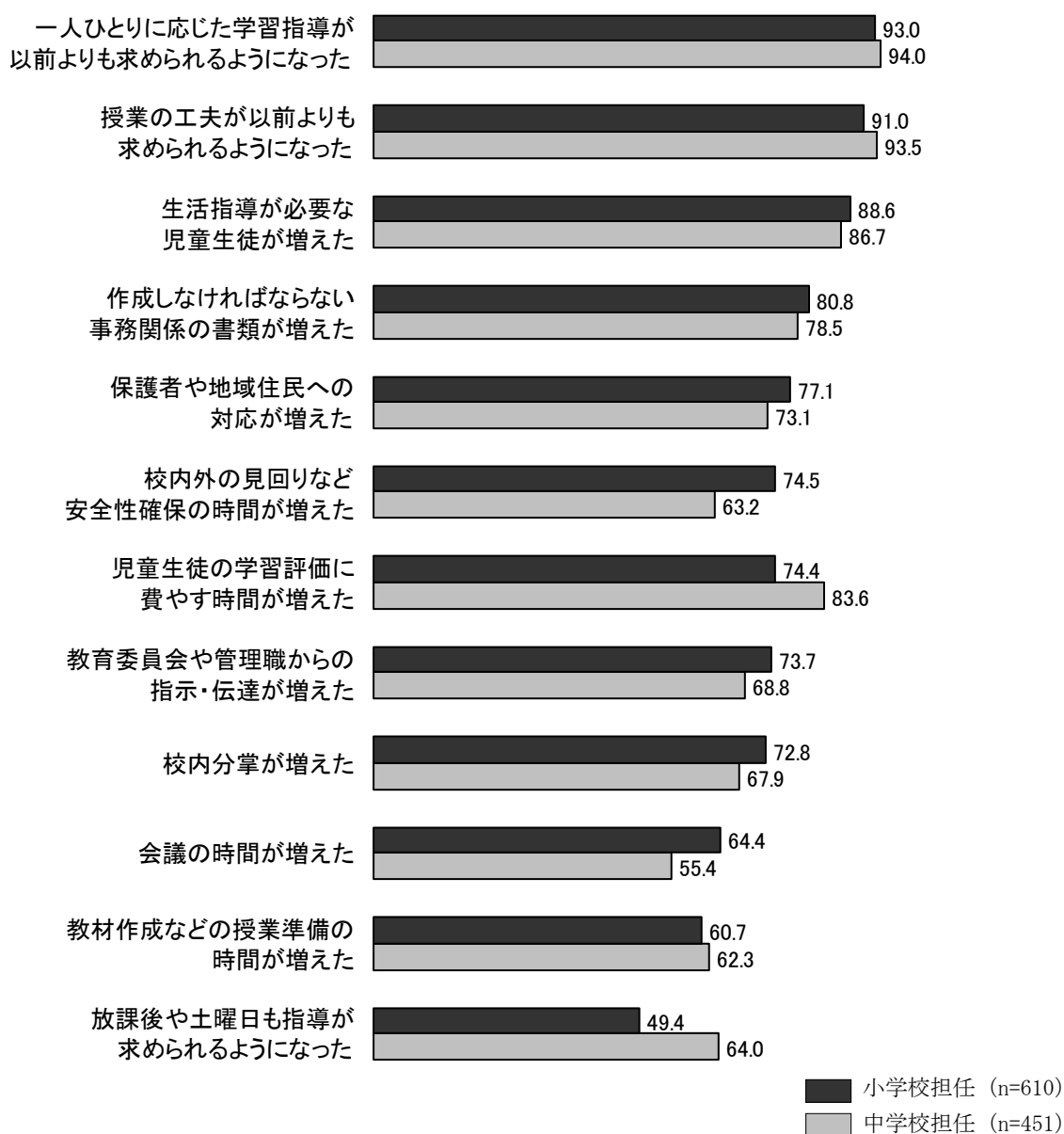
図2-2-2 勤務の状況（職階別）



\* 「とても感じる」と「まあ感じる」の合計 (%)

それでは、同じように「感じる」（「とても感じる」と「まあ感じる」の合計）という回答を、学校段階別に比較してみよう。図2-2-3に示したように、小学校担任と中学校担任で5ポイント以上の差が見られた項目に着目すると、小学校担任に多いのが「校内外の見回りなど安全確保の時間が増えた」（小学校担任 74.5% > 中学校担任 63.2%、以下同様）、「会議の時間が増えた」（64.4% > 55.4%）の2項目である。それに対して、中学校担任に多いのは、「児童生徒の学習評価に費やす時間が増えた」（74.4% < 83.6%）、「放課後や土曜日にも指導が求められるようになった」（49.4% < 64.0%）の2項目であった。

図2-2-3 勤務の状況（学校段階別）



\* 「とても感じる」と「まあ感じる」の合計 (%)

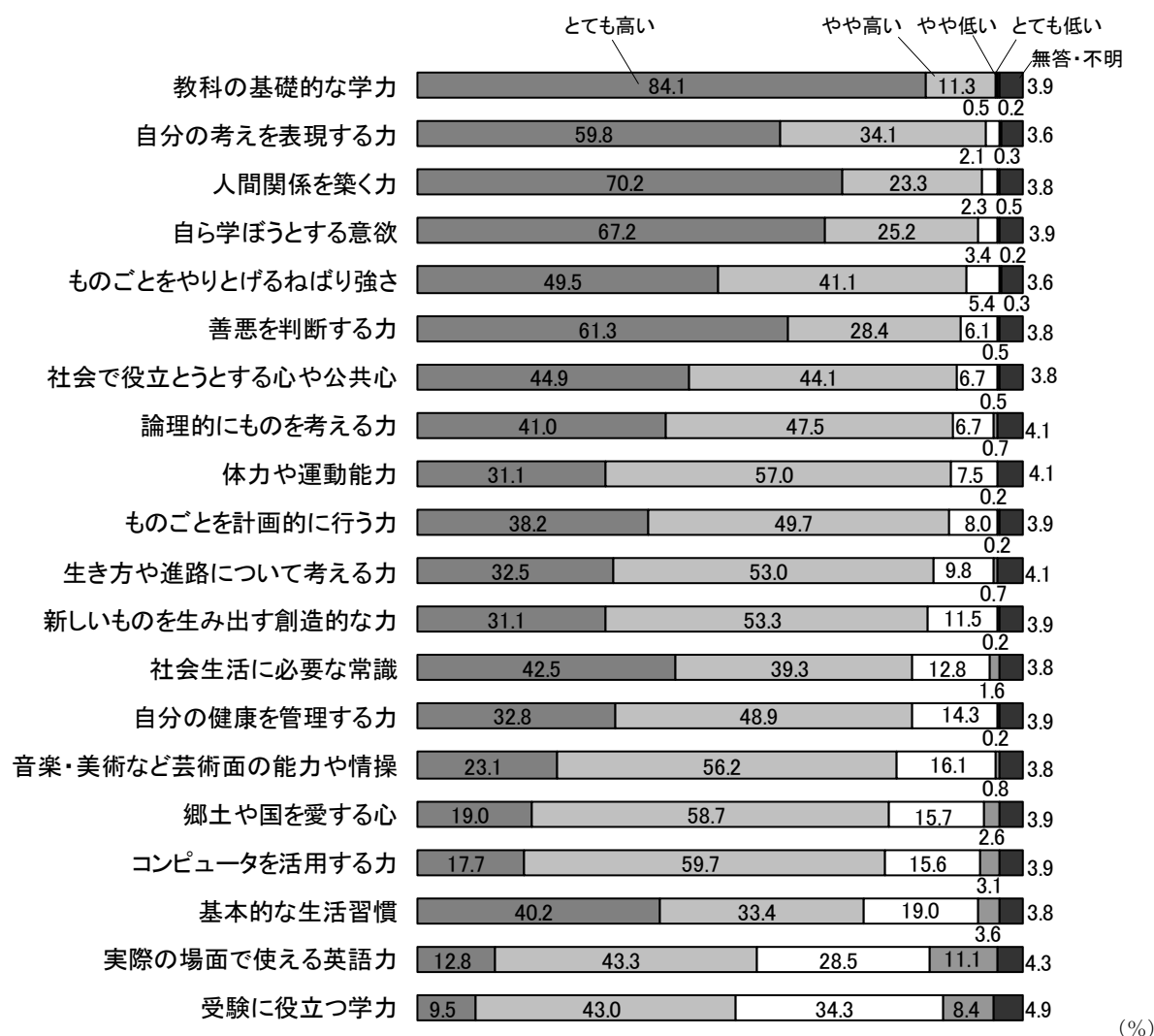
### 3章 学校教育に対する評価と意見

#### 1. 学校教育で身につける必要性が高い能力・態度

本章では、どのような能力や態度を学校教育のなかで身につける必要があると考えているか、また、そのような能力・態度が学校教育のなかで実際に身につけていると思うかをたずねた結果を示していく。

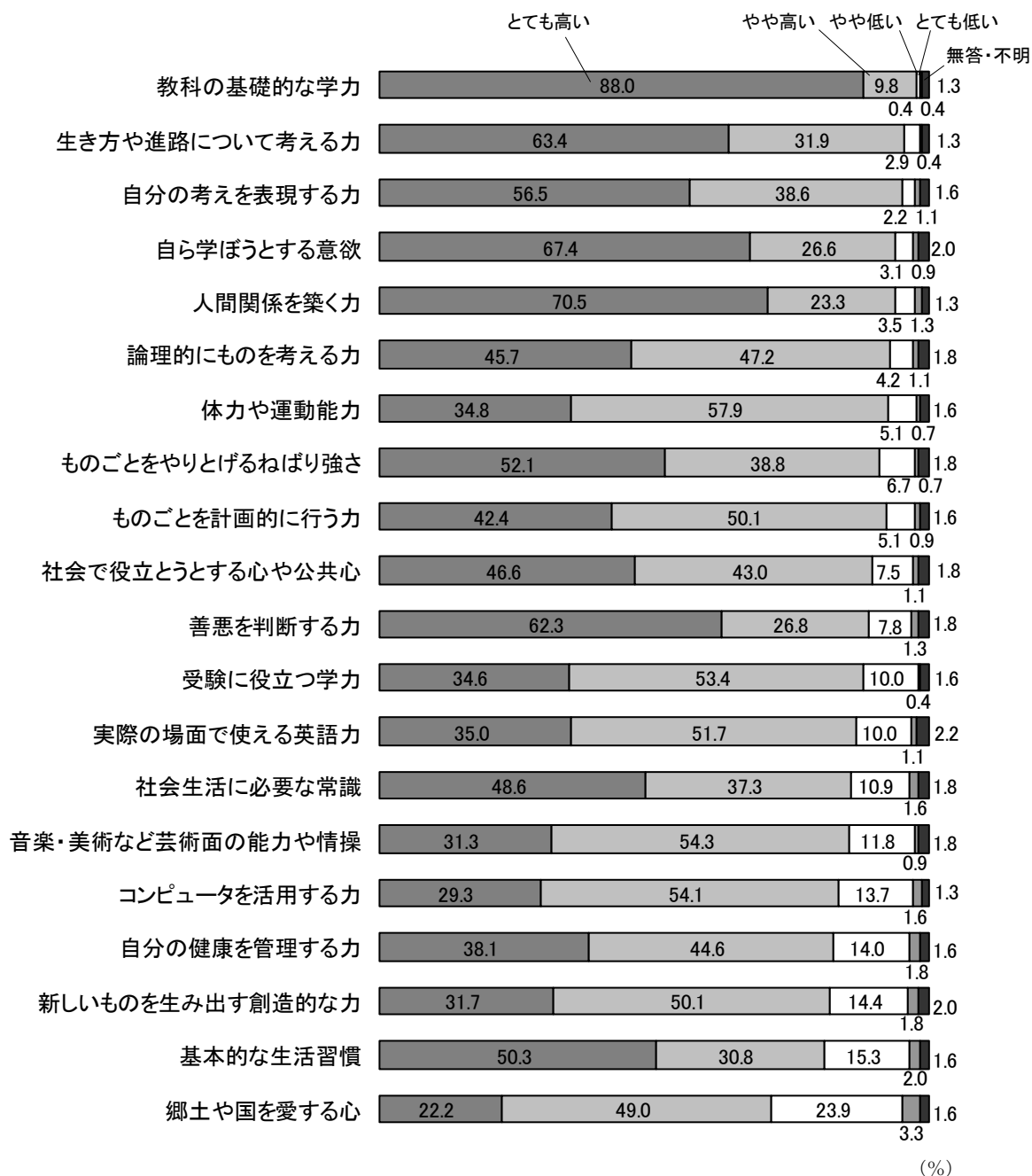
最初に、20項目にわたる能力や態度について、学校教育で身につける必要性が高いかどうかを、小学校担任にたずねた結果から見ていこう（図3-1-1）。身につける必要性が「高い」（「とても高い」と「やや高い」の合計）という回答は、「受験に役立つ学力」（52.5%）、「実際の場面で使える英語力」（56.1%）以外のすべての項目で7割を超えている。総じて、多様な能力・態度の育成を、学校が担わなければならないと認識しているようである。とくに、「教科の基礎的な学力」では、「とても高い」だけを見ても8割を超えており（84.1%）、もっとも重要視していることがわかる。

図3-1-1 学校教育で身につける必要性が高い能力・態度（小学校担任）



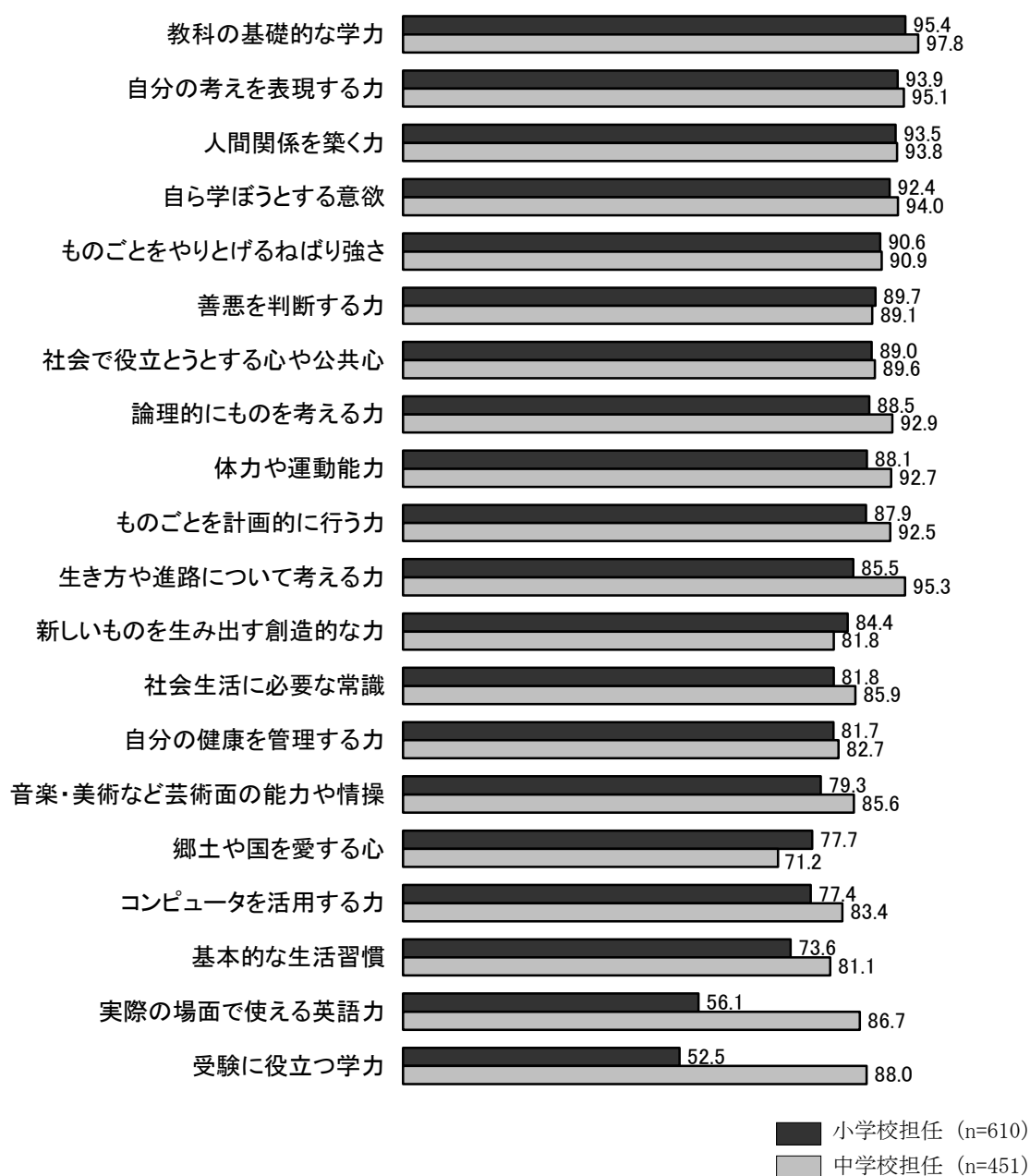
同様に、中学校担任に対しても、学校教育のなかで身につける必要がある能力や態度についてたずねた（図3-1-2）。すべての項目で「高い」（「とても高い」と「まあ高い」の合計）と答えた割合が7割を超えている。「教科の基礎的な学力」については、「とても高い」の値だけを見ても、9割近くに達し、小学校担任と同様にこの点を重要視していることがわかる。

図3-1-2 学校教育で身につける必要性が高い能力・態度（中学校担任）



学校教育のなかで身につける必要性がある能力や態度について、学校段階別に見たのが、**図3-1-3**である。小学校担任と比べて中学校担任に必要性が「高い」（「とても高い」と「やや高い」の合計）と考えられている項目が多く、中学校担任の数値は小学校担任とほぼ同等か、それよりも高い比率になっている。両者の差が大きい項目は、「生き方や進路について考える力」（小学校担任 85.5% < 中学校担任 95.3%、以下同様）、「コンピュータを活用する力」（77.4% < 83.4%）、「基本的な生活習慣」（73.6% < 81.1%）、「実際の場面で使える英語力」（56.1% < 86.7%）、「受験に役立つ学力」（52.5% < 88.0%）などで、とりわけ英語力と受験のための学力の育成については学校段階による違いが目立つ。

**図3-1-3 学校教育で身につける必要性が高い能力・態度（学校段階別）**



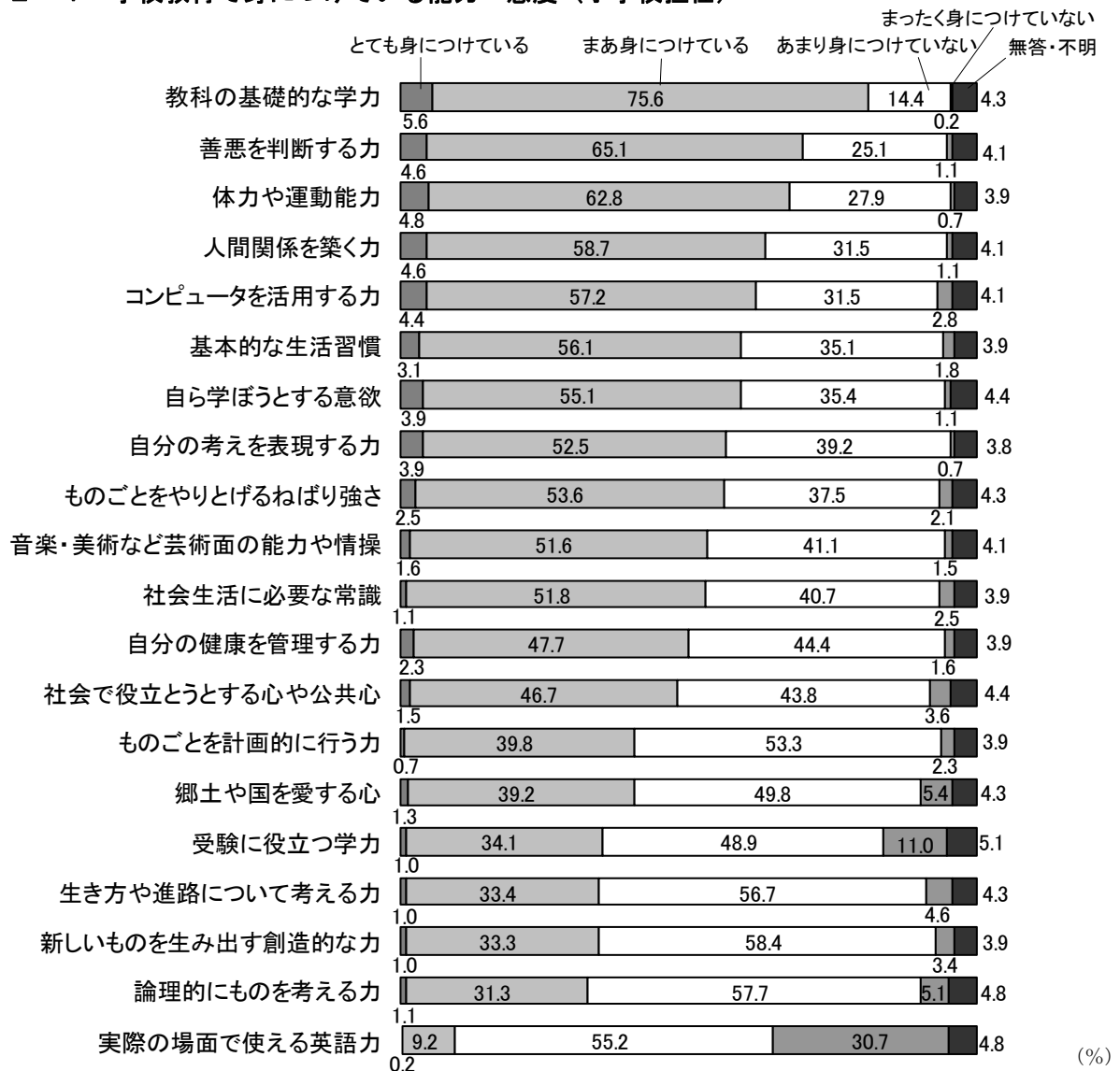
\* 「とても高い」と「やや高い」の合計 (%)

## 2. 学校教育で身につけている能力・態度

前節で、小学校担任も中学校担任も学校教育のなかでさまざまな能力や態度を身につけさせる必要があると感じていることを確認したが、それではそのような能力・態度を実際に育成できているのだろうか。ここでは、同じ項目を用いて、子どもたちが20にわたる能力や態度を実際に身につけているかどうかをたずねた。

図3-2-1は、小学校担任の結果である。「身につけている」（「とても身につけている」と「まあ身につけている」の合計）と答えた割合は、「教科の基礎的な学力」（81.2%）が8割を超えたが、それ以外の項目は7割を下回っている。さらに、「身につけていない」（「まったく身につけていない」と「あまり身につけていない」の合計）の数値に着目すると、「実際の場面で使える英語力」（85.9%）、「論理的にものを考える力」（62.8%）、「新しいものを生み出す創造的な力」（61.8%）、「生き方や進路について考える力」（61.3%）などはいずれも6割を超えている。

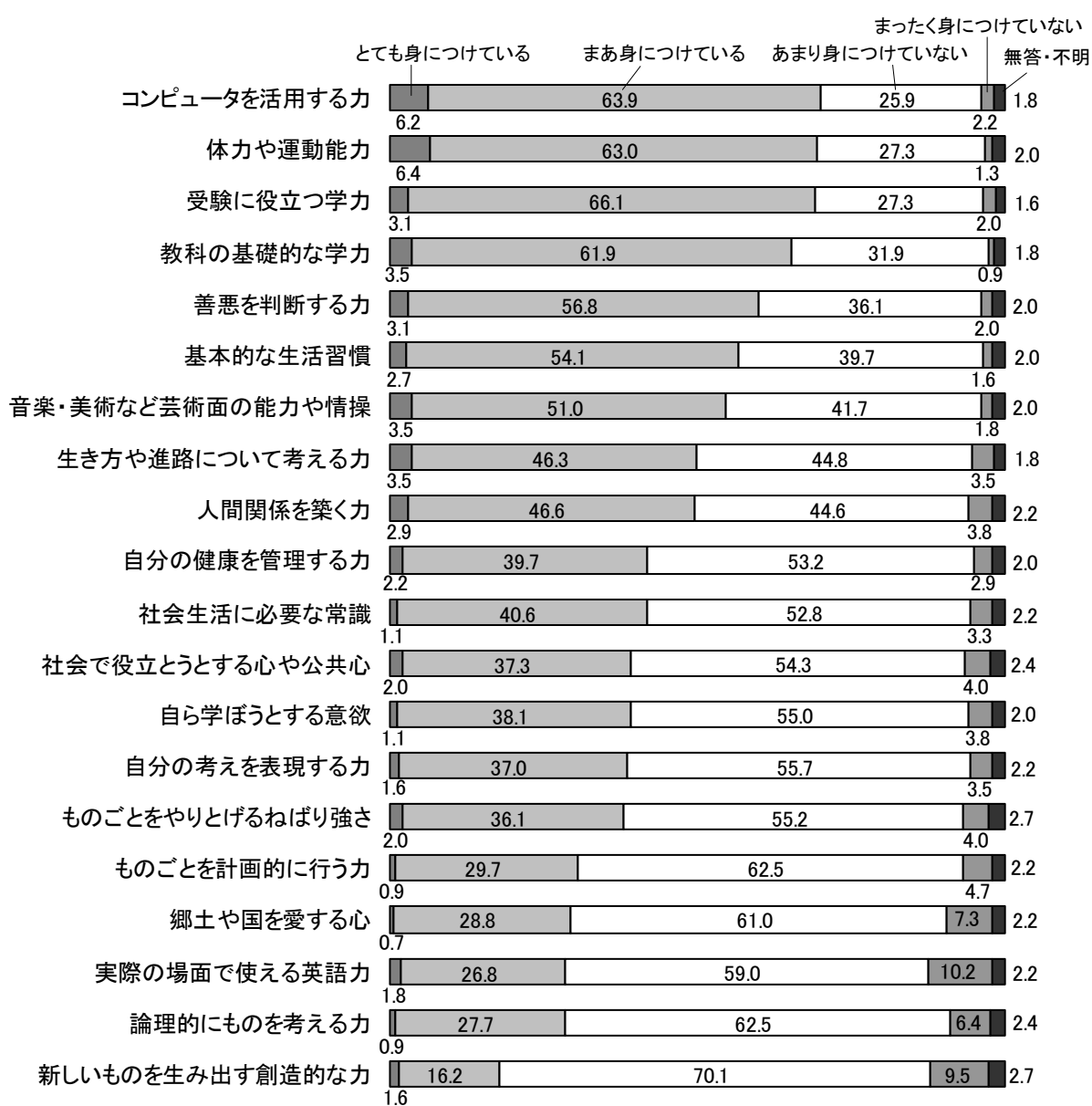
図3-2-1 学校教育で身につけている能力・態度（小学校担任）





小学校担任と同様に、中学校担任にも 20 項目にわたる能力や態度を、学校教育のなかで生徒が実際に身につけているかどうかをたずねたところ、**図 3-2-2**のような結果になった。「身につけている」（「とても身につけている」と「まあ身につけている」の合計）と答えた割合がもっとも高かったのは「コンピュータを活用する力」（70.1%）で、「体力や運動能力」（69.4%）、「受験に役立つ学力」（69.2%）とつづく。逆に、「身につけていない」（「まったく身につけていない」と「あまり身につけていない」の合計）と答えた割合が高かったものは、「新しいものを生み出す創造的な力」（79.6%）、「実際の場面で使える英語力」（69.2%）、「論理的にものを考える力」（68.9%）、「郷土や国を愛する力」（68.3%）、「ものごとを計画的に行う力」（67.2%）で6割を超えている。

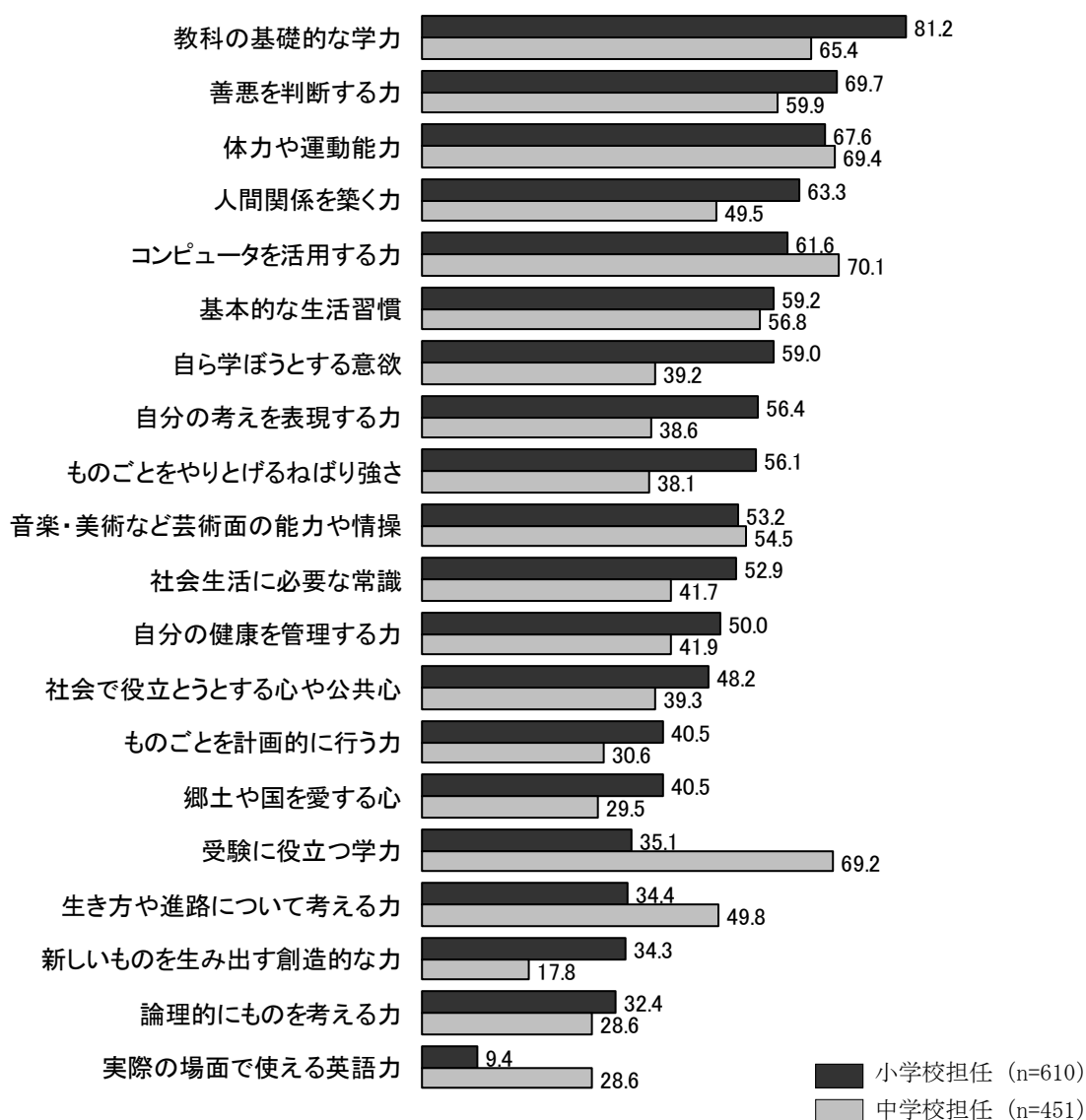
図 3-2-2 学校教育で身につけている能力・態度（中学校担任）



(%)

それぞれの能力や態度について、児童生徒が学校教育のなかで身につけているかどうかを学校段階別に見てみたところ、**図3-2-3**のようになった。小学校担任のほうが「身につけている」（「とても身につけている」と「まあ身につけている」の合計）という回答が多かった項目は、「教科の基礎的な学力」（小学校担任 81.2% > 中学校担任 65.4%、以下同様）、「善悪を判断する力」（69.7% > 59.9%）、「人間関係を築く力」（63.3% > 49.5%）、「自ら学ぼうとする意欲」（59.0% > 39.2%）などである。それに対して中学校担任に「身につけている」という回答が多い項目は、「コンピュータを活用する力」（61.6% < 70.1%）、「受験に役立つ学力」（35.1% < 69.2%）、「生き方や進路について考える力」（34.4% < 49.8%）、「実際の場面で使える英語力」（9.4% < 28.6%）などである。

**図3-2-3 学校教育で身につけている能力・態度（学校段階別）**

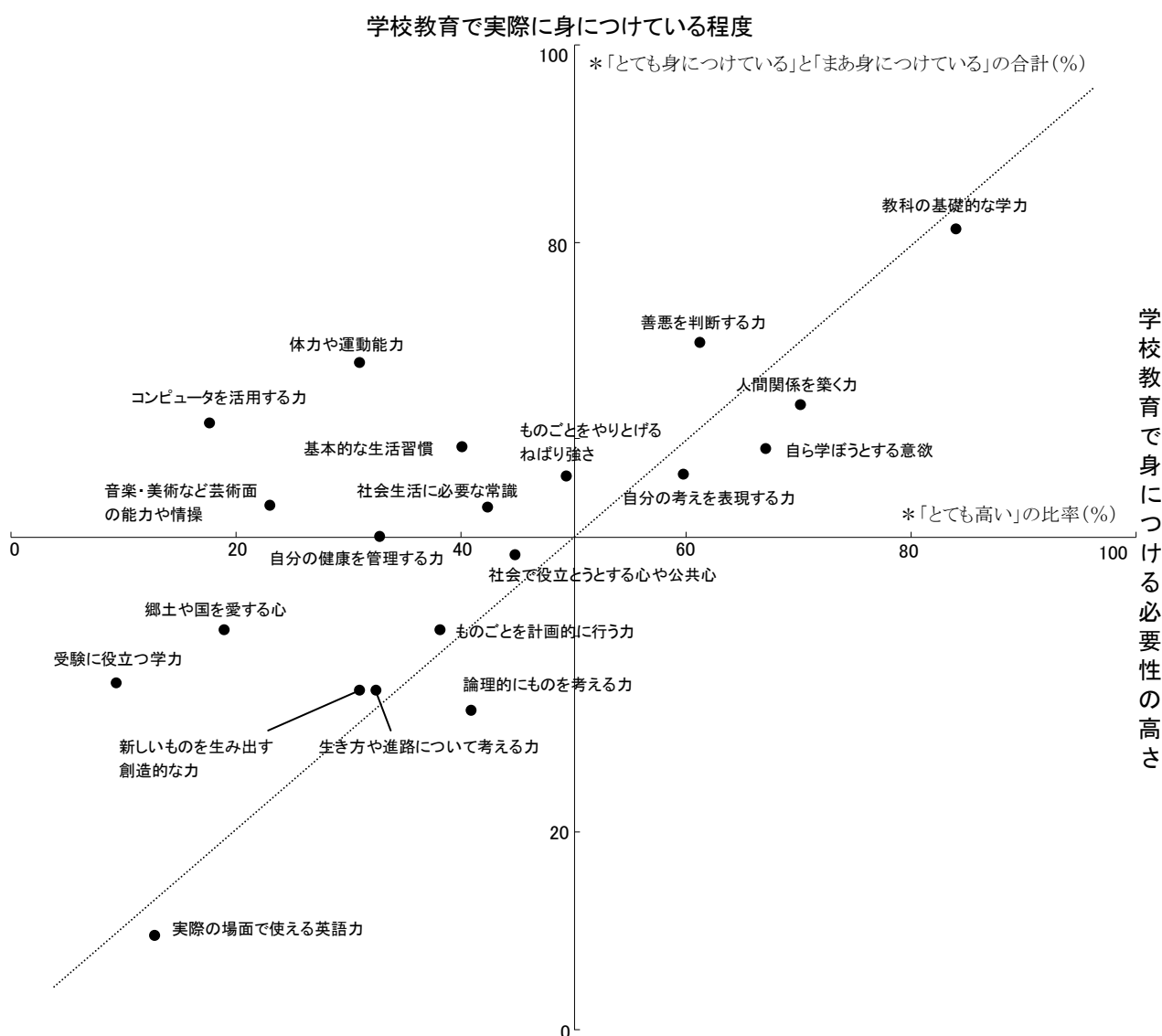


\* 「とても身につけている」と「まあ身につけている」の合計 (%)

では、「学校教育で身につける必要性」と「実際に身につけている程度」は、どのような関係があるのだろうか。ここでは、20項目にわたる能力・態度について学校教育で身につける必要性を横軸に、その能力・態度が実際に身につけている程度を縦軸にとって2次元平面上に各項目をプロットした。図3-2-4は、小学校担任の結果である。なお、必要性については、「まあ高い」までを含めると項目間の差が小さくなるので、ここでは「とても高い」の数値を用いた。それに対して、身につけている程度については「とても身につけている」という回答がいずれの項目も10%に満たないので、こちらは「とても身につけている」と「まあ身につけている」の合計数値を用いた。尺度が異なる数値を用いているため、あくまで目安として見ていくことにする。

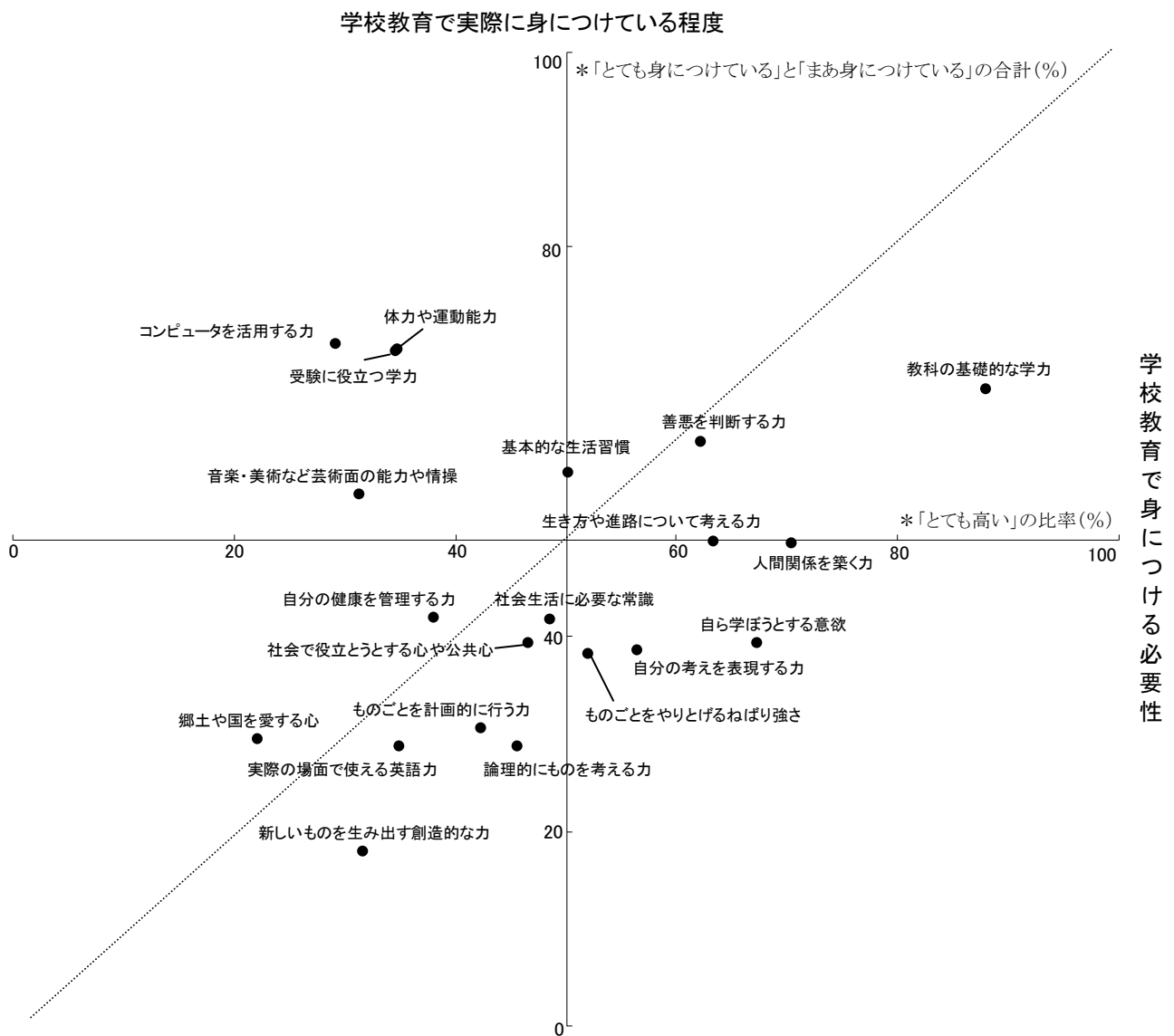
図をみると、「y = x」の線の付近か、それよりも上にプロットされている項目が多い。小学校担任は、学校教育で身につける必要性が相対的に低い項目についても、子どもが一定程度は身につけていると考えていることがわかる。身につける必要性が強く認識されている「教科の基礎的な学力」も、「まあ身につけている」まで含めれば8割が身につけられていると考えていて、右上にプロットされている。

図3-2-4 学校教育で身につける必要性と実際に身につけている程度（小学校担任）



一方、中学校担任は、「実際に身につけている程度（「とても身につけている」と「まあ身につけている」の合計比率）」が、「身につける必要性（「とても高い」の比率）」よりも低い項目が多い（図3-2-5）。「教科の基礎的な学力」「人間関係を築く力」「自ら学ぼうとする意欲」「自分の考えを表現する力」「論理的にもの考える力」「ものごとをやりとげるねばり強さ」「新しいものを生み出す創造的な力」などは、学校で身につける必要性の大きさに対して、実際に「身につけている」という回答が少ない。とくに小学校担任と比べた場合、その傾向が顕著である。中学校担任は、学校教育のなかで身につける必要があると認識している能力や態度を、十分に身につけられていないと考える傾向が強いようである。

図3-2-5 学校教育で身につける必要性和実際に身につけている程度（中学校担任）



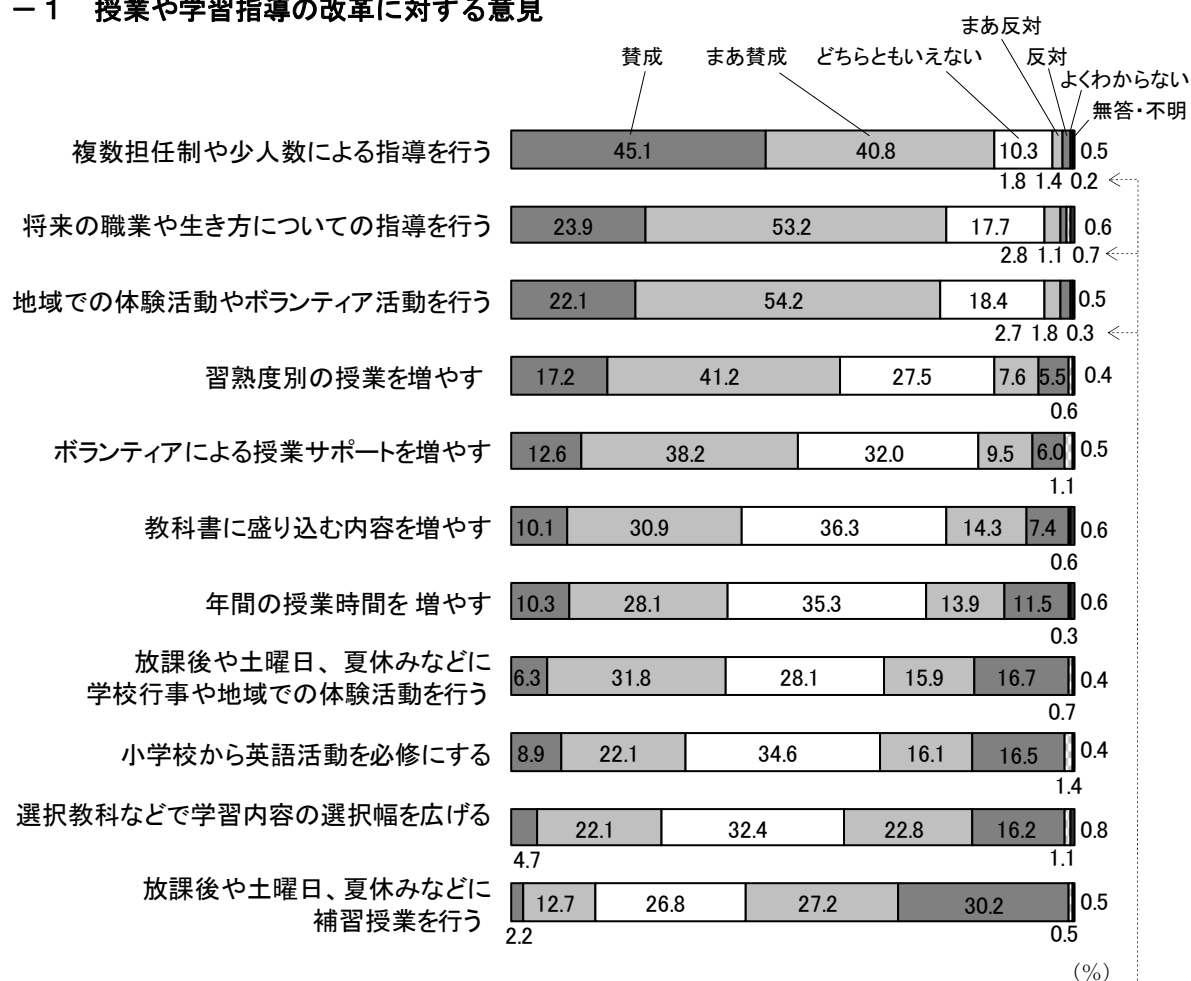
## 4章 教育改革に対する意見

### 1. 授業や学習指導の改革に対する意見

本章では、教育改革の一環として実践の一部に取り入れられたり、現在検討されたりしている取り組みについて、教員の意見を検討する。

最初に、授業や学習指導の改革についての賛否（図4-1-1）を見てみよう。「賛成」（「賛成」と「まあ賛成」の合計）と答えた割合がもっとも高かった項目は、「複数担任制や少人数による指導を行う」（85.9%）であった。つづいて、「将来の職業や生き方についての指導を行う」（77.1%）、「地域での体験活動やボランティア活動を行う」（76.3%）となっている。逆に、「賛成」が少なかった項目としては、「選択教科などで学習内容の選択幅を広げる」（26.8%）、「放課後や土曜日、夏休みなどに補習授業を行う」（14.9%）などであった。

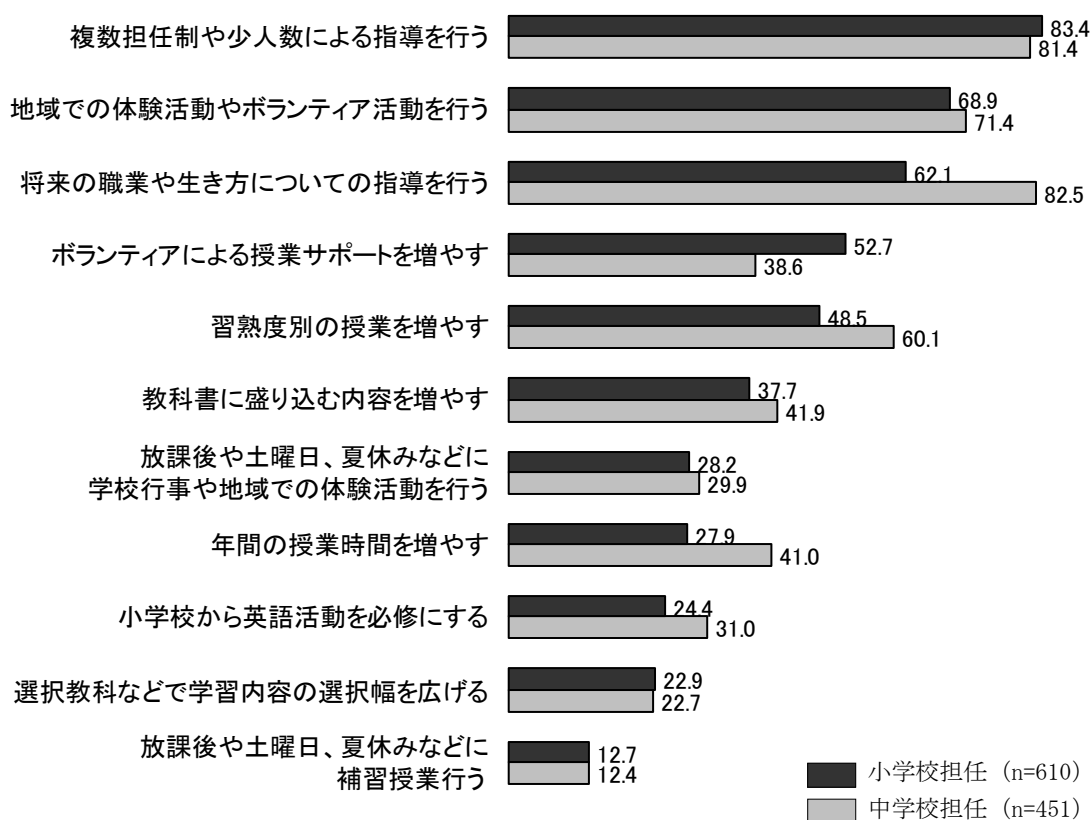
図4-1-1 授業や学習指導の改革に対する意見



数値は左から「まあ反対」「反対」「よくわからない」を示す。

つづいて、授業や学習指導の改革に対する意見を学校段階別に見たのが、**図4-1-2**である。小学校担任と中学校担任で5ポイント以上差が開いているものに注目すると、「将来の職業や生き方についての指導を行う」（小学校担任 62.1%＜中学校担任 82.5%、以下同様）、「習熟度別の授業を増やす」（48.5%＜60.1%）、「年間の授業時間を増やす」（27.9%＜41.0%）、「小学校から英語活動を必修にする」（24.4%＜31.0%）などで、小学校担任よりも中学校担任の「賛成」割合が多くなっている。一方、中学校担任よりも小学校担任の割合が多い項目は、「ボランティアによる授業サポートを増やす」（52.7%＞38.6%）である。

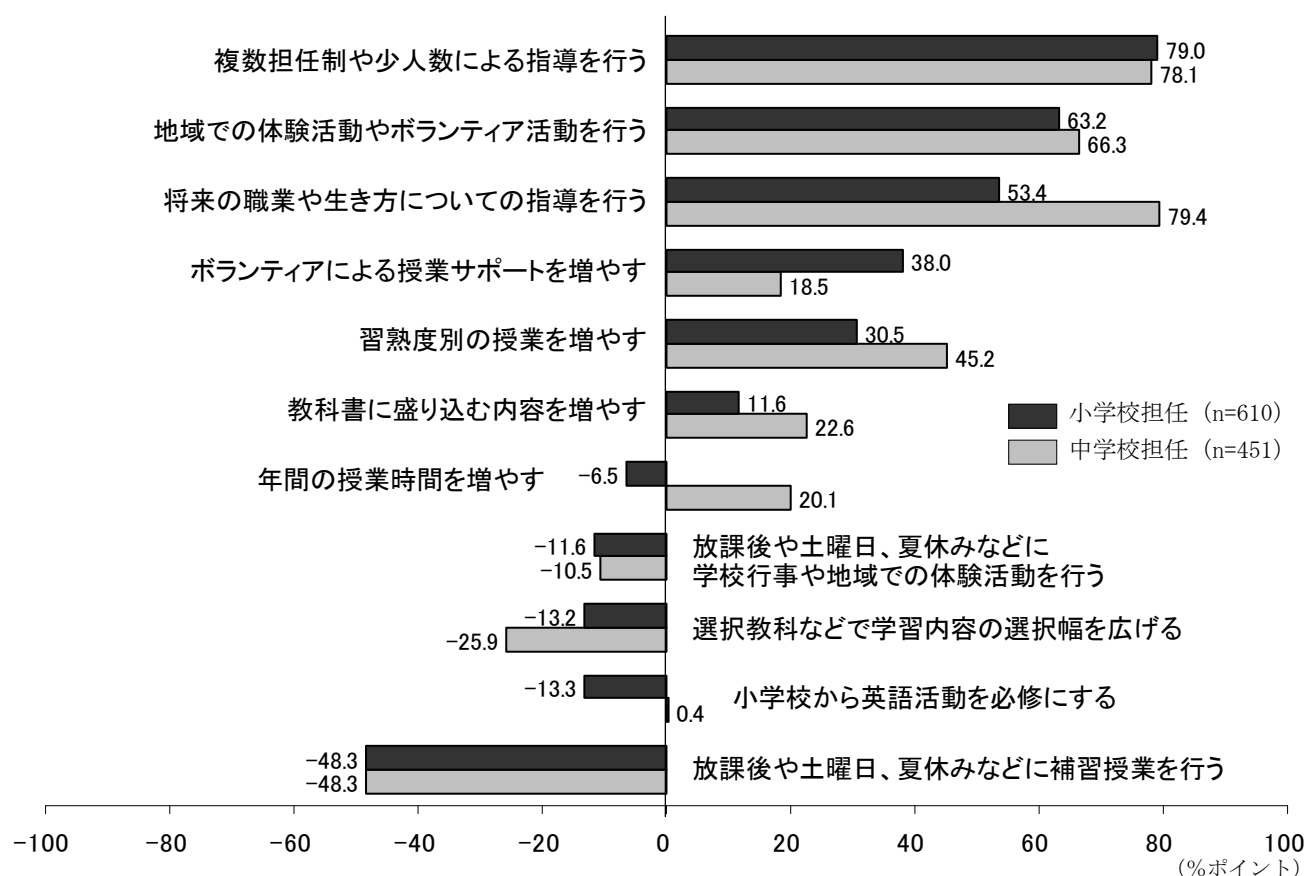
**図4-1-2 授業や学習指導の改革に対する意見（学校段階別）**



\* 「賛成」と「まあ賛成」の合計 (%)

同じく、授業や学習指導の改革に対する意見について、「賛成」（「賛成」と「まあ賛成」の合計）の数値から「反対」（「反対」と「まあ反対」の合計）の数値を引いて、賛成と反対のどちらが多いかを見たのが、**図4-1-3**である。11項目中、賛成が多い項目と反対が多い項目は、およそ半数ずつである。賛成がもっとも上回ったのは、小学校担任では「複数担任制や少人数による指導を行う」（79.0ポイント）であり、中学校担任では「将来の職業や生き方についての指導を行う」（79.4ポイント）であった。一方、反対が大きく上回ったのは、小学校担任・中学校担任ともに「放課後や土曜日、夏休みなどに補習授業を行う」（小学校担任-48.3ポイント、中学校担任-48.3ポイント）であった。また、小学校担任と中学校担任とで比較的大きく意見が分かれたのは、「年間の授業時間を増やす」であり、小学校担任では-6.5ポイントと反対が多かったが、中学校担任では20.1ポイントも賛成が反対より多かった。

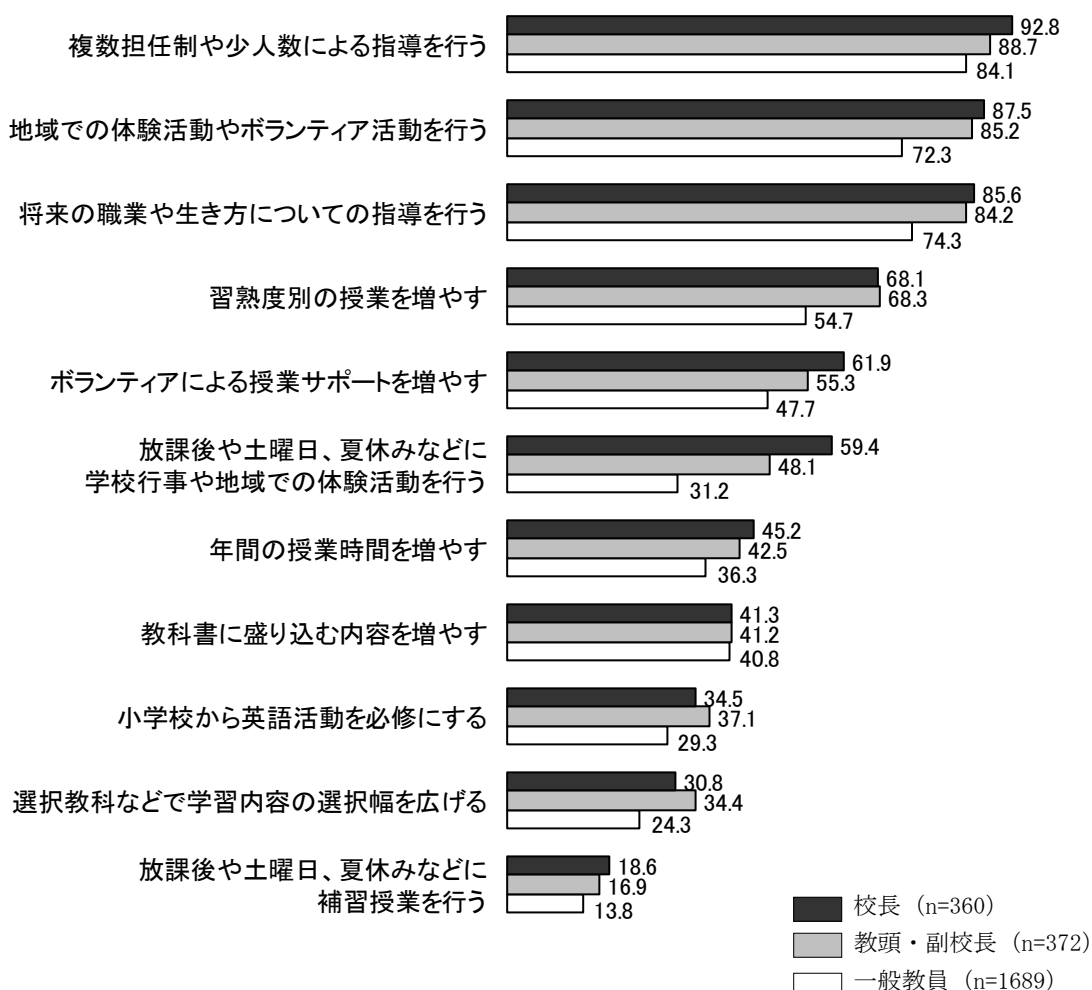
**図4-1-3 授業や学習指導の改革に対する意見（「賛成」-「反対」のポイント、学校段階別）**



\* 「賛成」（「賛成」と「まあ賛成」の合計）から「反対」（「反対」と「まあ反対」の合計）を引いて作図した。

それでは、教育改革に対する賛否は「校長」「教頭・副校長」「その他の教員」（以下では「一般教員」と表記）といった職階によって異なるのであろうか。図4-1-4は、授業や学習指導の改革に対する意見を職階別に見たものである。これを見ると、ここに掲げた改革施策は、概ね管理職ほど「賛成」が多いことがわかる。主なものをあげると、「複数担任制や少人数による指導を行う」（「賛成」と「まあ賛成」の合計：校長 92.8%＞教頭・副校長 88.7%＞一般教員 84.1%、以下同様）、「地域での体験活動やボランティア活動を行う」（87.5%＞85.2%＞72.3%）、「将来の職業や生き方についての指導を行う」（85.6%＞84.2%＞74.3%）、「習熟度別の授業を増やす」（68.1%≒68.3%＞54.7%）、「ボランティアによる授業サポートを増やす」（61.9%＞55.3%＞47.7%）、「放課後や土曜日、夏休みなどに学校行事や地域での体験活動を行う」（59.4%＞48.1%＞31.2%）などとなっている。なかには、校長と一般教員で15ポイント以上の差が見られる項目もある。

図4-1-4 授業や学習指導の改革に対する意見（職階別）



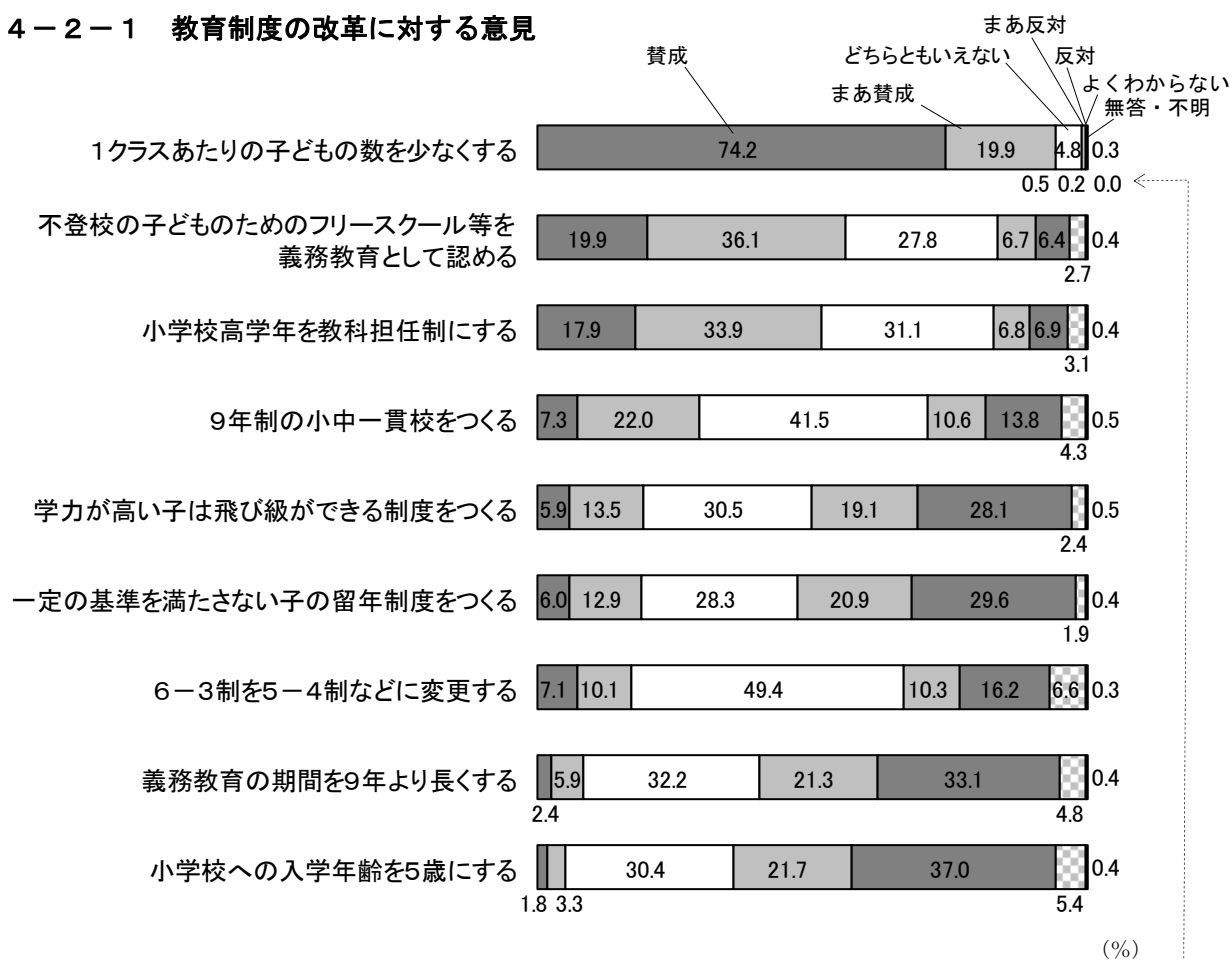
\* 「賛成」と「まあ賛成」の合計 (%)



## 2. 教育制度の改革に対する意見

授業や学習指導の改革につづけて、教育制度の改革について賛否をたずねた。図4-2-1は、教員全体の数値を示している。「賛成」（「賛成」と「まあ賛成」の合計）の回答がもっとも多いのは、「1クラスあたりの子どもの数を少なくする」（94.1%）であった。一方、少なかったのは、「小学校への入学年齢を5歳にする」（5.1%）、「義務教育の期間を9年より長くする」（8.3%）である。「6-3制を5-4制などに変更する」「9年制の小中一貫校をつくる」については、「どちらともいえない」という回答が多い（それぞれ49.4%、41.5%）。

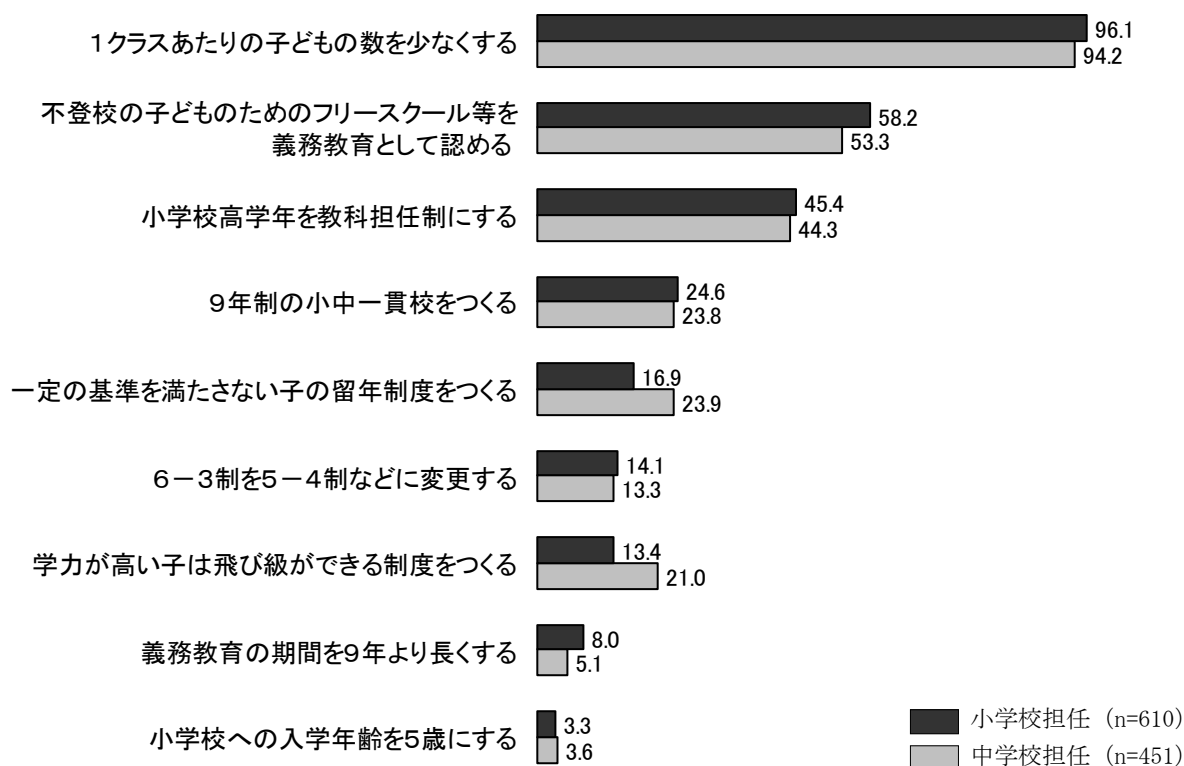
図4-2-1 教育制度の改革に対する意見



数値は左から「まあ反対」「反対」「よくわからない」を示す。

つづいて、教育制度の改革に対する質問への回答を、学校段階別に見てみよう。図4-2-2に示したように、ほとんどの項目で小学校担任と中学校担任は同様の傾向を示している。しかし、「一定の基準を満たさない子の留年制度をつくる」（「賛成」と「まあ賛成」の合計：小学校担任 16.9%＜中学校担任 23.9%、以下同様）、「学力が高い子は飛び級ができる制度をつくる」（13.4%＜21.0%）の2項目については、中学校担任の方が小学校担任よりも5ポイント以上「賛成」の比率が高くなっている。

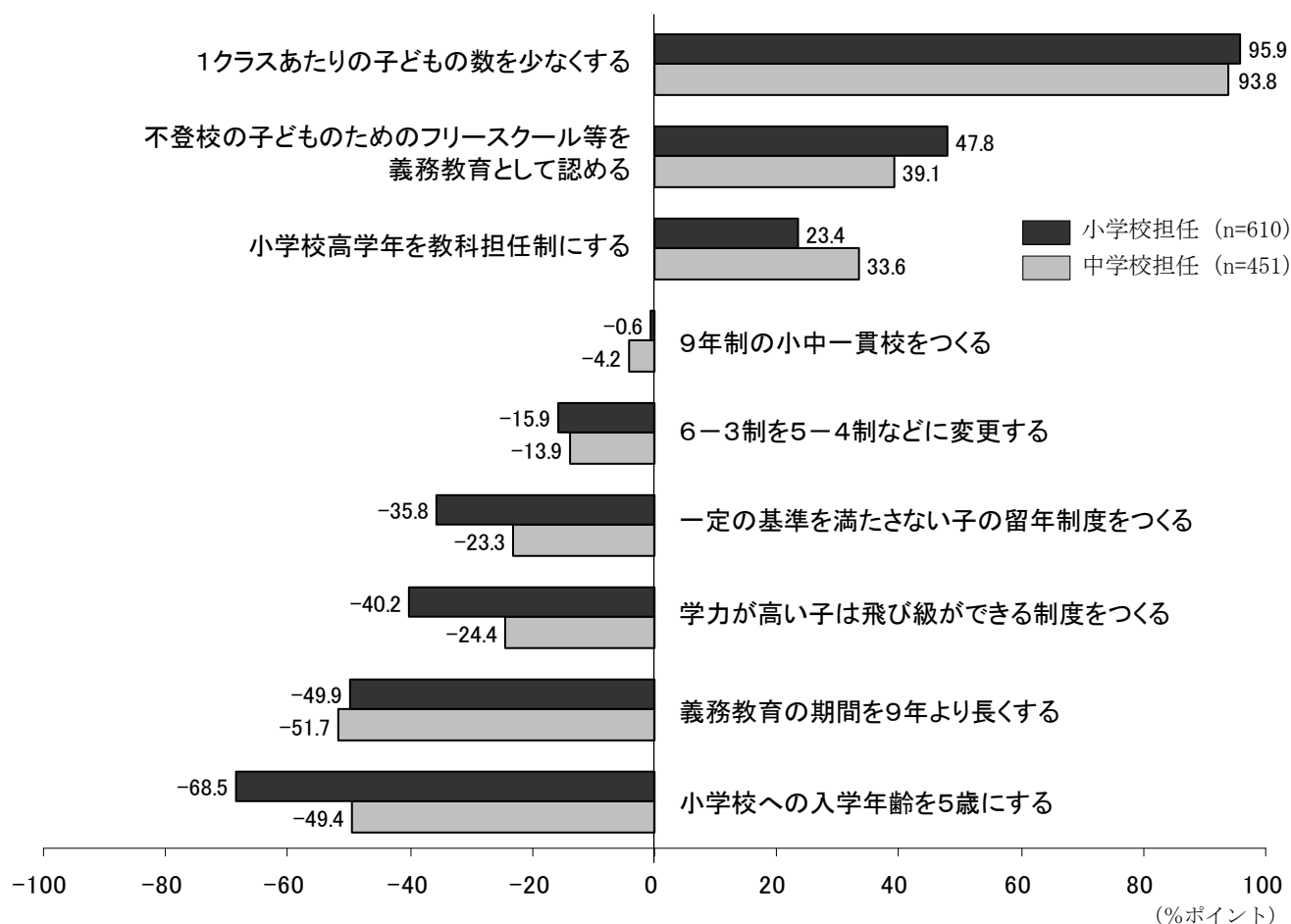
図4-2-2 教育制度の改革に対する意見（学校段階別）



\* 「賛成」と「まあ賛成」の合計 (%)

また、教育の制度の改革への賛否について、「賛成」（「賛成」と「まあ賛成」の合計）の数値から「反対」（「反対」と「まあ反対」の合計）の数値を引いて、賛成と反対のどちらが多いかを見たのが、**図4-2-3**である。賛成の意見が圧倒的に反対を上回るのは、「1クラスあたりの子どもの数を少なくする」（小学校担任 95.9 ポイント、中学校担任 93.8 ポイント）であった。一方、反対が賛成を大きく上回ったのは、「小学校への入学年齢を5歳にする」（小学校担任-68.5 ポイント、中学校担任-49.4 ポイント）、「義務教育の期間を9年より長くする」（小学校担任-49.9 ポイント、中学校担任-51.7 ポイント）であった。

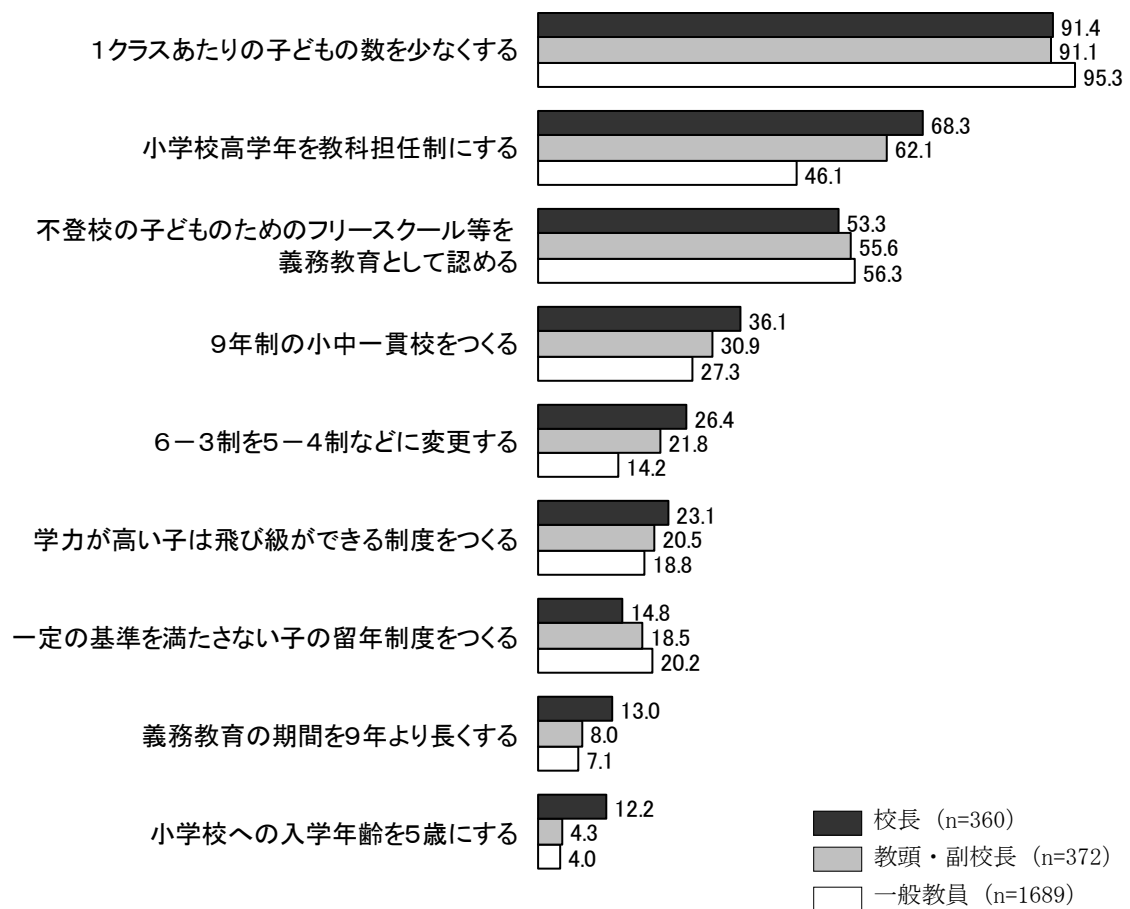
**図4-2-3 教育制度の改革に対する意見（「賛成」－「反対」のポイント、学校段階別）**



\* 「賛成」（「賛成」と「まあ賛成」の合計）から「反対」（「反対」と「まあ反対」の合計）を引いて作図した。

さらに、教育制度改革に対する意見を職階別に見てみたところ、**図4-2-4**のようになった。管理職に「賛成」（「賛成」と「まあ賛成」の合計）が多い項目は、「小学校高学年を教科担任制にする」（校長 68.3% > 教頭 62.1% > 一般教員 46.1%、以下同様）、「9年制の小中一貫校をつくる」（36.1% > 30.9% > 27.3%）、「6-3制を5-4制などに変更する」（26.4% > 21.8% > 14.2%）、「義務教育の期間を9年より長くする」（13.0% > 8.0% > 7.1%）、「小学校への入学年齢を5歳にする」（12.2% > 4.3% > 4.0%）などである。反対に、一般教員に「賛成」の数値が高い項目は、「一定の基準を満たさない子の留年制度をつくる」（14.8% < 18.5% < 20.2%）などであった。

**図4-2-4 教育制度改革に対する意見（職階別）**

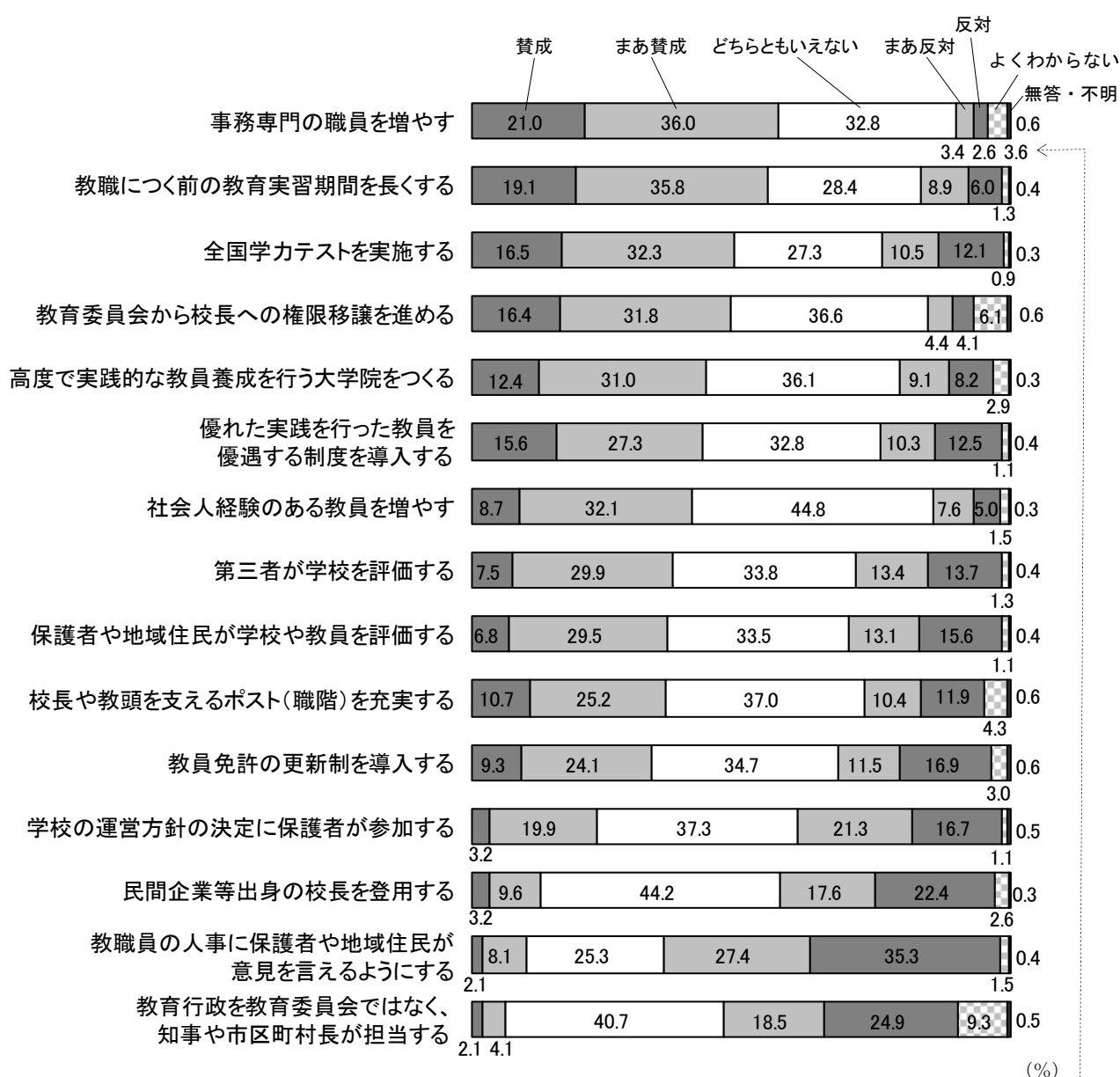


\* 「賛成」と「まあ賛成」の合計 (%)

### 3. 学校評価や人事の改革に対する意見

次に、学校や教員の評価、人事や教員養成などに対する改革の賛否をたずねた。図4-3-1は、教員全体の結果を示している。「賛成」（「賛成」と「まあ賛成」の合計）の回答が半数を超えるのは、「事務専門の職員を増やす」（57.0%）、「教職につく前の教育実習期間を長くする」（54.9%）である。一方、割合が低かったのは、「教育行政を教育委員会ではなく、知事や市区町村長が担当する」（6.2%）や「教職員の人事に保護者や地域住民が意見を言えるようにする」（10.2%）であった。また、「民間企業等出身の校長を登用する」（12.8%）も、同様に低い割合となっている。これらの学校評価や人事の改革に関する意見については、「どちらともいえない」と判断を留保する回答も多い。

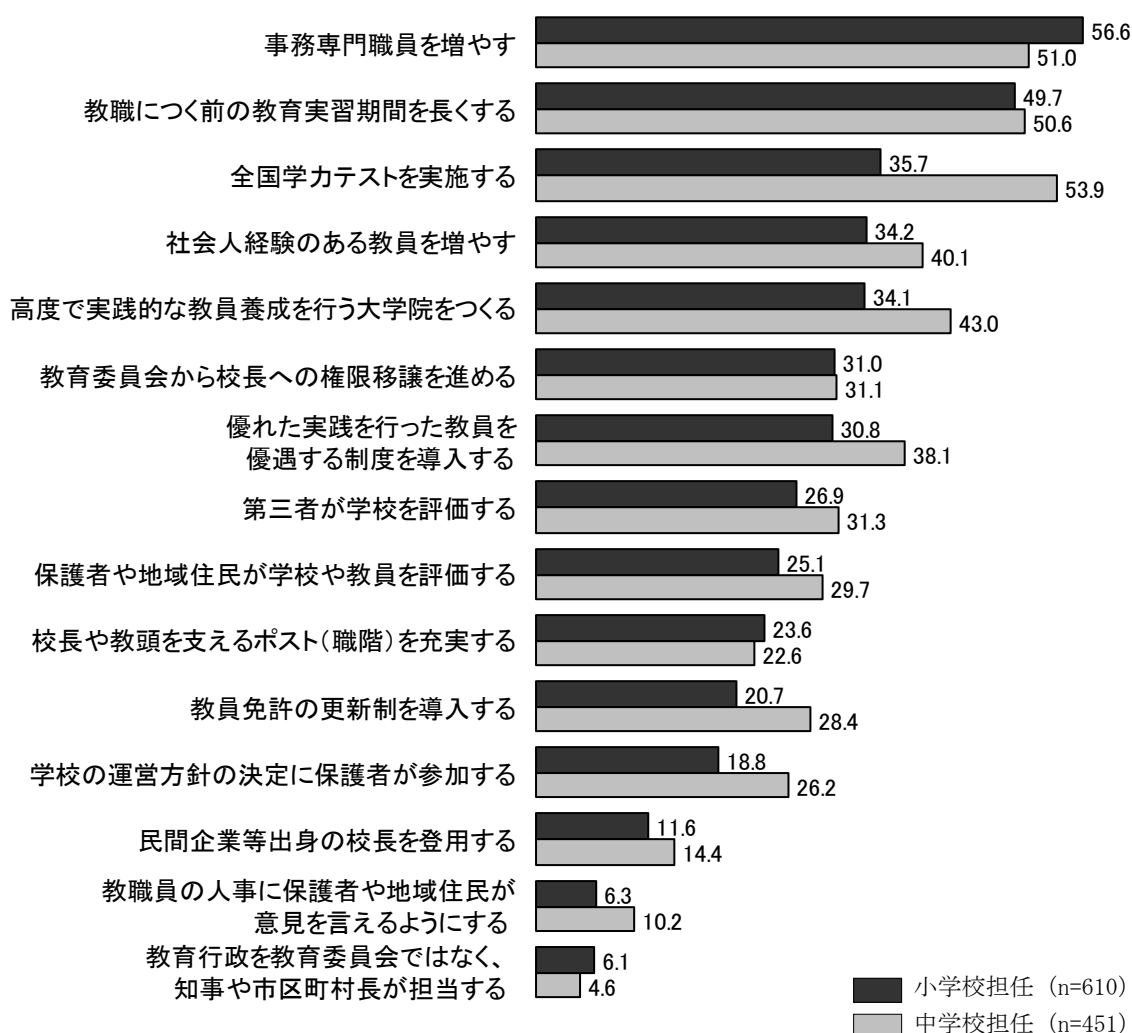
図4-3-1 学校評価や人事の改革に対する意見



数値は左から「まあ反対」「反対」「よくわからない」を示す。

次に、学校評価や人事などについての改革に対する意見を、学校段階別に見てみた（図4-3-2）。小学校担任の方に「賛成」（「賛成」と「まあ賛成」の合計）が多い項目は、「事務専門の職員を増やす」（小学校担任 56.6% > 中学校担任 51.0%、以下同様）など少数である。反対に、小学校担任よりも中学校担任の方が「賛成」が多い項目は、「全国学力テストを実施する」（35.7% < 53.9%）、「社会人経験のある教員を増やす」（34.2% < 40.1%）、「高度で実践的な教員養成を行う大学院をつくる」（34.1% < 43.0%）、「優れた実践を行った教員を優遇する制度を導入する」（30.8% < 38.1%）、「教員の免許更新制を導入する」（20.7% < 28.4%）、「学校の運営方針の決定に保護者が参加する」（18.8% < 26.2%）などである。

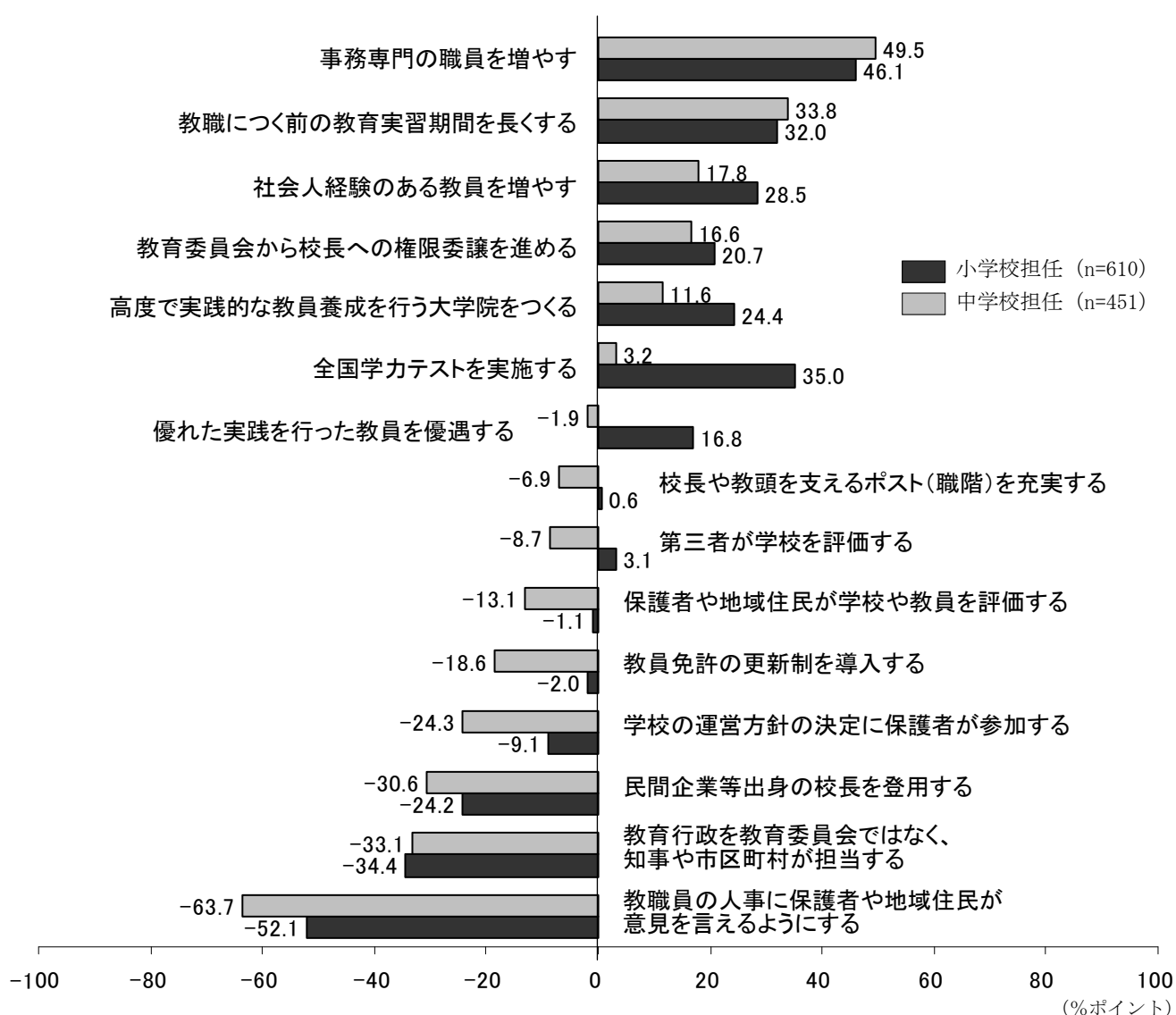
図4-3-2 学校評価や人事の改革に対する意見（学校段階別）



\* 「賛成」と「まあ賛成」の合計 (%)

同じく、学校評価や人事などについての改革に対する意見について、「賛成」（「賛成」と「まあ賛成」の合計）の数値から「反対」（「反対」と「まあ反対」の合計）の数値を引いて、賛成と反対のどちらが多いかを見たのが、**図4-3-3**である。この結果、もっとも賛成が反対を大きく上回ったのは、「事務専門の職員を増やす」（小学校担任 49.5 ポイント、中学校担任 46.1 ポイント）であった。また、反対の意見が多かったのは、「教職員の人事に保護者や地域住民が意見を言えるようにする」（小学校担任 -63.7 ポイント、中学校担任 -52.1 ポイント）であった。小学校担任と中学校担任でもっとも意見が分かれたのは「全国学力テストを実施する」で、小学校担任は 3.2 ポイント賛成が上回っただけだったが、中学校担任は 35.0 ポイントも賛成が反対を上回った。

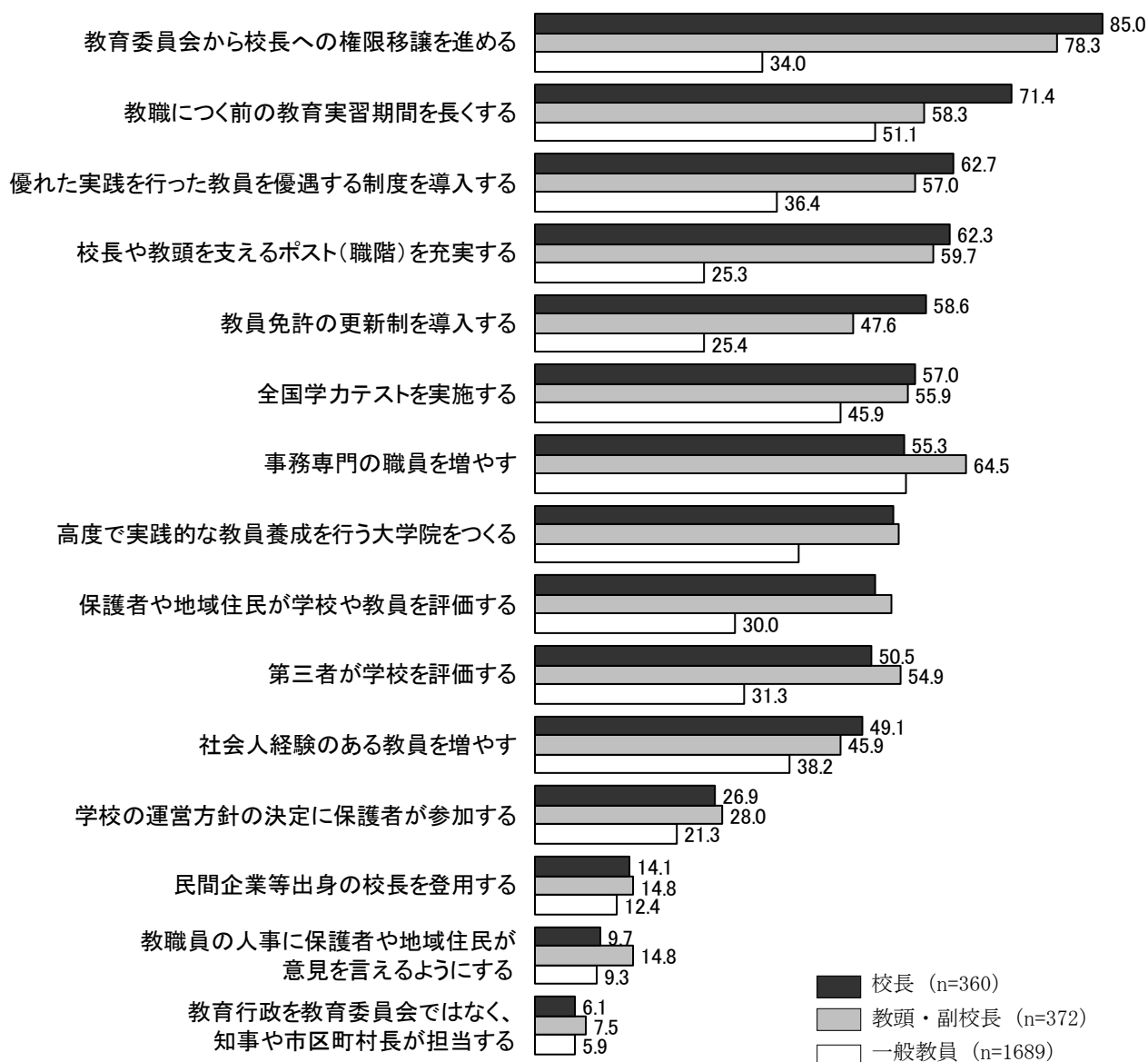
**図4-3-3 学校評価や人事の改革に対する意見（「賛成」－「反対」のポイント、学校段階別）**



\* 「賛成」（「賛成」と「まあ賛成」の合計）から「反対」（「反対」と「まあ反対」の合計）を引いて作図した。

つづいて、学校評価や人事などについての改革に対する意見を、職階別に見てみよう(図4-3-4)。「賛成」(「賛成」と「まあ賛成」の合計)と回答する割合について、多くの項目で差がみられた。「教育委員会から校長への権限移譲を進める」(校長 85.0%>教頭・副校長 78.3%>一般教員 34.0%、以下同様)では、校長と一般教員の間に51.0ポイントも差が開いている。さらに、「教職につく前の教育実習期間を長くする」(71.4%>58.3%>51.1%)、「優れた実践を行った教員を優遇する制度を導入する」(62.7%>57.0%>36.4%)、「校長や教頭を支えるポスト(職階)を充実する」(62.3%>59.7%>25.3%)、「教員免許を更新制にする」(58.6%>47.6%>25.4%)などで管理職が賛成する比率が高い。「保護者や地域住民が学校や教員を評価する」「第三者が学校を評価する」など、学校評価や教員評価についても、一般教員の賛成は3割程度にとどまっているのに対して、管理職は過半数が賛成している。

図4-3-4 学校評価や人事の改革に対する意見(職階別)



\* 「賛成」と「まあ賛成」の合計 (%)



#### 4. 教員の人事考課制度に対する意見

最後に、教員の人事考課制度についての意見をたずねた結果を見てみよう（図4-4-1）。

教員全体では、「能力や業績に応じた評価と処遇をすべきだと思う」が29.2%、「能力や業績に応じた評価はすべきだが、処遇に反映させるべきではないと思う」が32.7%、「能力や業績に応じた評価は、教員の職務の評価にはなじまないと思う」が29.3%と、ほぼ同じ割合で意見が三分された。

しかし、この意見は、学校段階や職階、勤務している地域によって違いがある。

たとえば、学校段階別では、「能力や業績に応じた評価と処遇をすべきだと思う」という意見は、小学校担任（20.2%）よりも中学校担任（25.9%）に多い。また、この意見は、職階別には管理職ほど賛同しており、校長45.6%、教頭・副校長40.1%に対して、一般教員は23.9%となっている。さらに、地域別に見ると、この意見はどちらかというと都市部ほど強く、農林漁業地域26.9%、都市郊外の住宅地域29.7%、都市中心部の住宅・商業地域34.6%という結果である。

図4-4-1 教員の人事考課制度に対する意見（全体、学校段階別、職階別、地域別）

